

いわゆる〈服装倒錯者〉のサブカルチャーへのフィールドワークの試みと、女装タブーの深層についての諸考察

——文明、および倒錯の概念 (2)——

渡 辺 恒 夫

(人文学部 心理学研究室)

An Attempt of the Fieldwork to the Subculture of
“Transvestites” in Japan and Some Considerations to
the Deep Causes of Male-to-female Cross-dressing Taboo

—— On Civilization and Concept of Perversion (2) ——

Tsuneo WATANABE

Laboratory of Psychology, Faculty of Humanities

Abstract: A club for male-to-female cross-dressers was observed and 27 members were informally interviewed. The results of this fieldwork was assessed and compared with the studies of transvestism in western countries. Most members of our club were considered as transvestites. But, contrary to the western transvestites, there was no evidence that they deny homosexual behaviours. Based upon this fieldwork, it was emphasized that the principal agony of the transvestites was their feeling of envy at woman, especially at the beauty of woman. And it was also emphasized that this envy was not only understandable, but also reasonable. Finally, the deep cause of the male-to-female cross-dressing taboo in modern civilization, including Japanese contemporary society, was considered and explained.

目 次

序 論	1
第Ⅰ部	
フィールドワーク	4
考察——服装倒錯・異性化願望・同性愛	8

第Ⅱ部	
女性羨望の心理	14
女装タブーの深層	21
REFERENCES	26

序 論

同性愛と等しく、あるいはそれ以上に、異装 cross-dressing とはもっぱら男性の問題であろう。われわれの社会にあつてはただ男性の異装 (= 女装) のみが嫌悪と非難とを惹き起こし、〈倒錯〉の概念が発動されて彼の社会的生命を断つのである。しかしながら歴史と未開社会の研究とがわれわれに教えるところは、それとは全く異なる様相である。異装の歴史は人類の歴史と共に古いが、伝統的前近代的諸文明は、女性の男装によりもむしろ男性の女装の方に、より多くの許容と社会的威信とを与えて来たように見えるのである。^{*} このことは、宗教史家の言うように (Eliade,

^{*} たとえば北米のインディアンの間では、幼時より女性的役割を好み、常時女装し、長じては他の男の妻となるという、〈ベルダッシュ Berdache〉の存在が知られ、ベルダッシュがシャーマンの役割を兼ねる部族もある。女性的役割に適合した少年に〈女〉として生きる途が保障されるという、かかる制度化された女装の例は、シベリア、オセアニア、オーストラリア、マダガスカル、南米等の部族にも広汎に見られるところであり、シャーマンとして高い尊敬を受けている者も多い。またシャーマンが一時的に女装する例もある。Green (1969) 参照。

1962), 異装の起源と原義とが, 両性具有状態の象徴的儀礼的な実現, 性による限定という人間的世俗的状况の起克, 「宇宙開闢前の原初の神秘的全体性回復の試み」等々に求められうるのであるとすれば, とりたてて不思議なことではないであろう. 多く男性優位社会であった伝統的諸文明において, 性を超越するというこの非常な特権が, なによりも<優れた性>の, それゆえに男性の特権として伝えられ来るのは, 十分に首肯しうることだからである. 「……ひとつの性から他の性への象徴的かつ一時的な移行は, ほとんどの場合, 事実上男性に許された優位を強調している. 男の女装が, これに対応する女の男装を誘うのは 極めて稀であることに注意せねばならない。」(Nelli, 1972)

わが国の伝統的社会にあっても, 男子同性愛と等しく男性の女装に対する<近代的>な非難の痕は見い出せない. 古代と中世とを代表する国民的英雄, ヤマトタケルと源九郎義経とはそれぞれ女装のエピソードを持つし, 能舞台の女役も男性によって演ぜられた. なかんずく17世紀は, 衆道の名のもとに同性愛の倫理と美学とが古代ギリシアのそれにも比すべき高みに達した時代であったが, それはまた, 女方という, 世界にも類のない女装芸術の成立をみる時代でもあった. 仮舞伎の女方とは, 奇しくも同時期にあえなく消滅の憂き目を見た英国演劇の女役少年俳優のように, 単に女優の代用品なのではなかった. その目ざすところが<女>の理念の, 男性の肉体による完璧な実現にあったばかりではない. 舞台の外にあっても, 愛欲生活においてさえも, 彼は公然と<女>であり続けることができたのである. 江戸中期以降は, 戦国武士, 薩摩武士に代表されるような「ドーリア人にも比すべき武人的同性愛」(Daniel et Baudry, 1973)の盛行のあとを承けて, 蔭間茶屋の女装の麗人による売色が公然と行なわれ出した時期であるが, これとても元来は, 舞台役者の売色の風習から発した流行なのであった.

しかしながら, 明治以降の日本社会の際限のない近代化と西欧化の進展は, 衆道の伝統にとどめを刺すのと同時に, 女装に対しても強大なタブーを形成して臨むに至ったのである. なるほど今日, 女方はなお——奇蹟的にも——余喘を保っているかに見える. けれども歌舞伎そのものが, われわれの生活感覚とは縁遠い骨董物的なものになってしまっているし, 女方の本来のふかいエロスの意味にもヴェールがかけられたままである. また, 欧米諸国におけるごとく法的制裁を加えられることがないからといって, わが国の女装趣味者にのしかかる社会的タブーの圧力が, より弱いものだということもできないであろう. 一般の社会生活者にとって女装の露見が社会的破滅へと通ずるという事態は, 法的処罰規定のあるとないにさしてかわりはない. それゆえ現代の日本にあっても女装趣味はふかく地下へ潜行し, 同性愛よりもさらに一層ふかく潜行したままなのである. 女装者のうちある者は——なかんずく比較的初期にその嗜好をあらわし, かつ誘惑を受けやすい境遇に育った者は——プロの女装者への途を歩むかもしれない. 彼らの中にはブラウン管にあで姿を登場させるほどの<スター>もいて, われわれはそれを奇妙な動物か何かのように眺めるのであるが, 彼らの存在が氷山の一角に過ぎず, いまこの瞬間にも全国数万の<しろうと>の女装者が, あるいは密室でひとり化粧に耽り, あるいは夜の街を発覚の不安と闘いながら歩き回っているというこの恐るべき事実にはついぞ考えが及ばない. その実態に関して本格的な科学的調査のメスが入れたことも, 心理学・精神医学・社会学を通じて——筆者の知る限りでは——ない.

この20年来, 欧米諸国には性意識のめざましい革新が進展しつつあるかにみえる. ホモセクシュアル・パワー (Gai Power) が登場し, 多くの国々で法的処罰規定が廃止された. 1974年にはアメリカ精神医学協会が, 同性愛を精神異常のリストから除くことを決議した. Journal of Homosexuality 誌が創刊され, <治療者—患者>という態度の枠組を離れた立場からの同性愛研究の途がひらかれた. 性の科学全体が驚くべき発展をとげ, 従来までヴェールに包まれていたいわゆる<性逸脱者>の実態が次々に明るみに引き出された. なかでも特筆に値することは, 従来まで, 同

性愛とも 服装倒錯 transvestism* とも混同されて来た 異性化願望 transsexualism の存在が確定され、Bengamin (1954, 1964, 1966) その他によって心理療法の無効性と、重度のものへの性転換手術による〈援助〉の必要性が強調されたことである。同じ女装趣味であっても、受身的同性愛者、服装倒錯者、異性化願望者の3者それぞれ動機と意味とを異にすることが主張され、同性への性的誘惑を動機とする 同性愛的女装 homosexual cross-dressing、女性への全面的転換というその根本的動機からすればいまだ不満足な解決でしかない 異性化願望の女装 transsexual cross-dressing に対して、女装自体に快楽を見出し目的として追求する 女装者にのみ、Hirschfeld (1925) 以来の服装倒錯 transvestism の語があてられるようになった。以後主として性医学・医学的心理学の側からの異性化願望と服装倒錯の研究は、飛躍的に進展することとなった。** 転換手術を強要して外科医を悩ませることも多い重度の異性化願望者は別として、女装趣味者が治療を望んで病院や療法家を訪れることはまれであるが、これら医学的研究の網の目からは脱れてしまうような人びとを対象とした調査研究もいくつか現われている。女装愛好者 transvestite を自認する生物学者 V. Prince は、1959年女装愛好雑誌〈Transvestia〉を創刊し、定期購読者を対象とする大規模な調査を開始した (Prince, 1967, Prince & Bentler, 1972)。女装者のサブ・カルチャーへのフィールドワークも試みられるようになり、社会学者の参加もみられる (Feinbloom, 1976, Levine, 1976)。いまや、服装倒錯それ自体を「疾患もしくは神経症と見なす根拠は何もなく」それゆえ研究の方向を「服装倒錯に対する社会の反応の例へと向け直すのが妥当なのかもしれない。……そもそも女装の何が社会をかくも恐れさせるのであろうか」(Brierley, 1979) という発言が、おそまきながらではあるが性科学者の側からもなされる時代となりつつあるのである。

かかる欧米での活況にひきくらべてわが国における研究の貧困には、なんとも理解しがたいものがある。あるいは法律的問題の不在という条件が、逆に作用した結果とも考えられるかもしれない。しかしながらたとえ非人間的処罰規定がなくとも、発覚が社会的生命の死を招くという事態にはさして変わりはないはずであり、数え切れぬ人びとが、単にエロスの自己実現の機会を奪われているのみならず、自らを異常者、モンスターと思ひなすことによって、日々の自己毀損を余儀なくさせられているというこの現状を、黙視していて良い理由にはならないはずである。筆者はかかる現況を憂え、本来公表の意図なくしてなされた本研究をあえて公刊し、沈黙のタブーの池の面に一石を投ぜんと願うものである。まず第Ⅰ部では、1977年当時実在したさる女装趣味者の〈結社〉についてのフィールドワーク的報告がなされ、わが国における女装者の実態に照明が投げかけられるであろう。考察の項では、欧米の性科学において発展させられて来た知見が紹介され、われわれの結果との一致点と相異点が浮彫りにされ検討に付されるであろう。また本研究が、女装者を特異な一群として他の人びとから区別するような性科学におけるいかなる試みとも画然として異なっていることが強調されねばならない。本研究は、女装者の女装行為にその〈日常的〉な場で接することを通じ、一見奇異とみえる彼らの嗜好と心理とが通常心理として十分了解されうるものであることを示しつつ、女装者に対する社会の側の反応の深層に測鉛を下すことにより、女装の問題を女装タブーの問題としてその真の場所に置くことをめざすものである。それゆえ、それぞれ「女性羨望の心理」「女装タブーの深層」と題されたいくぶん長い議論が、第Ⅱ部として続くことになるであろう。

* transvestism を服装倒錯と訳するのはこの論文の趣旨にそぐわないのであるが、慣行に従った。最近朝山新一氏 (1978) は異性装の訳をあてられたが、日本語になじまない。筆者としては、日常語でもある女装愛好の語をあてるのがよいと考えており、本論中でもこの語を用いた箇所もある。

** 詳細は考察の項を参照。

第 I 部

フィールド・ワーク

女装者に接触するにはいくつかの途がある。最も容易なのは、大都市なら今日必ず見られるゲイバーを巡り歩くことであるが、この種の場所では出会うことのできる職業的女装者が、必ずしも女装者一般の傾向を代表しているとはいいきれないところに難点がある。一般的女装者の実態に探りを入れるには、信頼できるアマチュア的女装者の協力を得るのに如くはないが、かかる人物と邂逅するには、しかるべき雑誌の文通欄を利用するか、さもなければ全くの倖幸に頼るしかない。倖幸に頼るとは甚だとりとめのないようではあるが、常に十分な注意力と好奇心とを合わせ持ち続けてさえいれば、思い設けぬ場所に女装趣味者を発見できるものであることを、筆者は身を以って経験している。

いったい日本全国にこれらプロでない女装者が何人ひそんでいるかは、なかなか見当のつきにくいことである。Benjamin (1966) は、全米で1万から100万の間という、ある女装者の推定を紹介している。筆者は4年ほど前、女装者のサブカルチャーに通曉したさるルポライターから、5万～10万という推定を聞いたことがあるが、あるいは当たらずといえども遠からずの数字かもしれない。これら女装者の中の何割かが、東京大阪等の大都市にあって〈結社〉を形づくり、場所を定めて定期的に会合し、かつ初心者への指導に当たっている。1977年の時点で筆者はこのようなグループの存在を7つまで突きとめることができた。それらはしかるべき雑誌に広告を載せたり、ゲイバーを窓口としたりしている、比較的規模が大きいグループであって、より小規模かつ全く秘密的なものが、他に相当数あるのではないかと想像される。筆者は1976年から77年にかけてその中のふたつのグループ（仮称Bクラブ及びCクラブとする）に接触し、うちひとつについては（Cクラブ）相当数の会員にインタビューすることができた。^{*} しかしながら秘密漏洩は最も恐れられる事態であるので、クラブの名称所在地はもとよりのこと、接触の具体的経路等についてもこの報告では明らかにすることができない。またインタビューの対象となった会員の紹介に当たっても、経歴その他詳細に立ち入ることを避けざるをえなかった。そのためこの報告全体の科学的信頼性が、いささか犠牲にされてしまったことは否定できない事実であろう。^{**}

〈女装愛好のクラブ〉Cクラブはさるマンションの一区画を借りて夕刻以降 ほぼ毎日ひらかれる。会員数は地方会員を含めて数百名と推定されるが、出席者は日に平均10～20名といったところである。〈女性会員〉と〈男性会員〉とがあり、後者は、自らは女装趣味をもたず、女装者の魅力に慣れて入会した能動的同性愛者である。ただし男性会員の数は、全体の1/4程度に過ぎない。また男性会員のうちは1/2ほどが、かつて女性会員として入会し、中途から〈男性〉に転向した人びとである。以下単に「会員」という場合は、特に断りのないばあい女性会員のみを指すことにする。年齢構成については、女性会員では最低19歳から最高60歳まで幅が広いが、うち30歳以下は2割程度に過ぎず、40代と50代とではほぼ半数近くを占めるのが注意をひく。既婚者も30代以上ではかなりの高率に達するようである。また男性会員は、全員が30歳以上である（最高70歳）。職業はタブーとなっている話題のひとつであるが、知りえた限りでは、会社員、団体役員、大学教師、学生、自由業等々と幅が広い。一般の平均より学歴が高いような気がしたが、これはイギリスにおけるBrierley (1979) の観察と一致するものである。

^{*} インタビューの実施にあたっては、Cクラブ会員であるM. R. 氏の全面的な協力を得た。ここに感謝の意を表明したい。

^{**} 信頼度と精度の高い報告のためには、倫理的問題の発生を避けたいのであれば、対象となったメンバー全員の事前の了承が必要とされるであろう。現状ではむしろそれは不可能なことである。

入会希望者は殆どの場合、クラブが発行している機関誌の予約購読者となってから入会の意志を固めて訪れ来るものである。機関誌は市販されず、某雑誌にときおり広告を出すのみであるが、発行部数は数千部に達するという。男性会員のばあいには、さるゲイバーを窓口として訪れる者も多い。新入会員の大部分が全くの女装未経験者か〈自室内女装者〉であり、それゆえ先輩会員による懇切な手ほどきを必要とする。多くの会員が、長年女装への慣れと女性羨望に悩まされながらも、何ら具体的行動に踏み出すことなく徒らに過ごしたという経歴をもつ。女装したいと冀いながらもあるいは必需品を入手するだけの勇氣を持たず、既婚者のばあいにはひたすら発覚を恐怖し、表面は家底にも社会的地位にも恵まれたひとかどの紳士でありながらも、心の奥では嫉妬羨望に苛まれ、変性への空想に湧き返っている。クラブの存在を知り、機関誌の記事を唯一の慰めとするようになってからも、あるいはクラブへの一抹の不信感をぬぐいえず、あるいはおのれに女装は似合わないものと決め込んだまま50の声を聴き、内心の衝迫に耐え切れず切々たる手紙を寄こして破滅覚悟でクラブの扉を叩く者も珍らしくない。機関誌にはこの類の痛切極まりない告白が、しばしば掲載されるのである。

……毎日の通勤の途すがら行き交う若い女性たち。スカートの裾を蹴し、ハイヒールの踵をコツコツいわせ、女であることの誇りと欲びに満ちて闊歩するOLたちの姿を眼にするたびに、羨望に悩まされないときとてありません。ああ、女でさえあったなら!…(略)…こうしていくたびデパートの婦人洋品売場へ行ったことでしょう。ブラジャーが、パンティが、そしてストッキングが、7色の光輪に包まれて私を魅惑します。でも私には、とうとう買う勇氣が出ないのです。……、こうして何もせぬまま、結婚しても、子供をもうけても、この呪わしい性癖を直すことができず、ただ空想の中でのみ、私は美女で、犯され売られ苛まれて……、そしていつのまにか40代も半ば過ぎてしまった私。ふとしたことで貴クラブのことを知り、最後の救いの綱としてお便りさしあげる次第です。私のような者でも女になれるのでしょうか……(以下身体的条件の記載)

クラブの雰囲気は存外に家庭的であり、キャバレーのような浮華を予想したり、(これは中高年層に多いが)背後に脅迫組織の暗躍を気づかっての不安や悲壮感も急速に消失して、手取り足取りの女装術の伝授を受け、女性名でもって皆に紹介されてクラブの一員となってゆく。化粧術は極めて高度であり、驚くばかりの変身を遂げる者も多いが、どうやら仮舞伎での女方の化粧技法を承け継いでいると察せられた。とはいえ似合い方は様々で、風采あがらぬ小男が美女に変身するかと思うと眉目秀麗な青年がいかに厚化粧を凝らしても「女には見えぬ」こともあり、男女の別を問わず〈男顔〉と〈女顔〉とがあることをあらためて思い知らされた。全員が自ら選んだ女性名で呼び合うが、「泉」「燕」といった中性的な名が好まれ、また中高年層では苗字でもって呼び合うことが多いのは、お互いの照れのためであろうか。

女装の心理的効果については、「女になった」という感情を共通の基礎として、性的な恍惚感を味わうという者もいるが、「想像していたより冷静な、当然といった気持」「本来の自分に選ったという安定感」「男であることの絶えざる緊張からの解放」「鎧兜をようやく脱ぐことができた」等々と、むしろ安らぎ、リラックスの感情を報告する者が多いようである。また同じ恍惚感でも、性的なものというよりも、「自分の肉体と周囲の大気との境界が消失した感じ」といったような、Jaspers (1948) が「外界に対立する自我意識」の項のもとに述べている、自我意識の変容を主体とした体験を報告する者もいる。

かなりの数の女性会員が、クラブ内での男性会員との性行為の経験をもつが、当然のことに若ければ若いほど、その機会は多くなる。もし〈彼女〉が充分若くそして美しければ、入会のその日のうちに〈男〉の手が付くだろうし、数少ない男性会員の中に特定の愛人を見つけることも不可能ではない。こうして何人かの若い会員が〈ダンナ持ち〉となり、外出に伴なわれて歩き、そして花形と

してクラブに君臨するのである。店を買ってもらい男性としての経歴から完全に脱却し、いまではゲイバーのマダムにおさまっている者さえいるという。男性会員との間の〈異性愛〉の他に、レスビアンラブと称される、女性会員同士の性行為もみられる。純粋なレスビアンラブは、双方女装のままなされるものを指すのであるが、この場合年長の方が能動の役に当たるのが普通である。また、女性会員であるにもかかわらず、日によっては女装せず、他の若い女性会員を誘惑するという、〈両性的〉な者もいる。このような両性者は、おそらくは女性会員から男性会員への移行期にあるのであろう。かなりの者がこうして美貌で年下の女性会員との邂逅をきっかけとして、男性会員へと転身してゆくものである。

多くの会員にとって〈女として愛される〉ことが、女性としての資格取得のための通過儀礼 initiation の意味を持つことは疑いえないが、それにも増して重大な関心事は〈外出〉であろう。公衆の視線に晒されてもおお正体を看破されないおのれの〈女〉としての完璧さを自ら確認したときほど、女装者にとって誇らしい瞬間はないのである。クラブはこの点について慎重策を採り、未経験者未熟練者のひとり歩きは禁じている。いかに鏡の前では完全な女であったとしても、なにげない仕草や歩きぶりから、男が露見しないとも限らないからである。ただしはたち前後の若い会員には比較的気軽に外出する者も多いが、これは肉体的な条件もさることながら、その比較的気楽な社会的立場にもよるものであろう。また、年令的条件以上に、背文の高くないことと骨格の余り発達していないことは変装の必須の条件であり、この要件が充たされず外出許可が下りないままに、ついに〈クラブ内女装者〉にとどまる者も少くない。

以下に、比較的つぶさに面談しえた5名の会員について、そのプロフィールを紹介することにする。

N. X. ——クラブ歴7年。43才。大学教師。体格は男性としては小柄・華奢な方だが、とりたてて女性的というほどでもない。30才で結婚し、1児をもうけている。和装を好み、「洋服では女になった気がしない」というほどの着物マニアである。素顔はいたって平凡な中年紳士が、着付を済ませると俄然しとやかな日本女性に変身するのは観ものであった。外出にもヴェテランで、年配の男性会員と夫婦気取りでしばしば歌舞伎座等へ行くという。ただし受身的性行為への関心は、若い頃はいざ知らず現在はなく、その代り女装をしない日など、若い女性会員へ〈男〉として臨むこともあるようである。女装への慣れが耐えがたいまでになったのは結婚後のことで、妻の留守を見はからってその着物を身に着けてみるようになった。思春期以来、和装の女性へ異常なまでの魅力を感じて来たが、何時の頃からか着物そのものへの、そして帯その他の小物類への関心と愛著となり、ついには自ら身に着けてみたいと冀うようになったのだという。和装についての知識には——文化史的背景をも含めて——驚くべきものがある。「着物は最高の芸術品です。絶美の世界です。女だけに独り占めされてたまるかと思うのです」——こうインタビューに熱っぽく語るのであった。

K. O. ——クラブ歴12年。37歳。会社員。もともと女性会員として入会したが、4年ほど前に男性会員に転向した。かなり小柄、小ぶりで、やや女性化の傾向がみられる。32歳で自殺未遂。33歳で周囲の強い勧めで結婚したが、子供はない。性格は快活、饒舌、社交的で、「世話好きの叔母さん」といった印象を与える。女性の性役割に加えて社会的役割に対する強い羨望を有し、20歳前後から、「若奥様」といった役割を空想しては自慰に耽っていたという。入会後は〈花形〉として男性の愛人も出来、受身的性生活を享受していたが、容色の衰えを自覚する一方、年下の女装者への欲望にもめざめ、愛人を失なったのをきっかけとして男性会員に転向した。現在は若い女性会員を愛人とし、またゲイバーのホステスとも関係がある模様である。性的

対象としては女装者にしか関心がなく、「素顔はどうでもよく、美しく化けてくれさえすればよい」と言う。性的交渉には *feratio* や *coitus per anum* を用いるが、愛人の評によると、かつての女役としての豊富な経験を生かし、『して欲しいと思うことを必ずしてくれる、ナルシズムの理解者』ということである。ただし女性羨望を脱した訳ではけっしてなく、「女は得だ」が口癖であり*、しばしば、男役としてのおのれを自嘲する。総じて、女性的性役割への根強い願望を、相手の若い女装者へ仮託することによって自らは女性羨望を克服しようと努めているという印象が強い。が、その企てはいまだ半分しか成功してはいないようである。

U. Q. ——クラブ歴4ヶ月。32歳。会社員。大柄で骨格の逞しいスポーツマンタイプ。結婚歴6年。1児がある。結婚後いくばくも経ずして妻の肉体と服装への羨望の虜となり、留守を見計らっては化粧し妻の服を身に着け、鏡の前で空想に耽るようになった。年と共にこの習癖が嵩じて強迫的となり、わずかの機会をも見逃すことができず、「時間がない時には墨汁で眉を描く」といった状態へ到ったため、「最後の救いの綱」としてクラブへ入会した。けれども初めての完全女装の試みも、自分には似合わぬ、いくら取り繕っても女には見えぬ、外出など思いも寄らない、という失望に終わり、女装熱もいささか醒めた。現在は、クラブへ来ても女装せぬことが多く、他の同様の境遇にある会員と、「男に生まれたという身の不運」を嘆き名うことに最大の慰めを見出ししているようである。「男はひとり残らず女装羨望を隠し持っているのだと思います」というのが持論であり、これを、さながら造物主を告発するかの如き烈しい口調で語る。

M. R. ——クラブ歴1年。26歳。会社員。独身。体格は華奢で小柄な方だが、とりたてて女性的というほどのこともない。14歳の頃同性愛的誘惑を受けた経験があり、20歳を過ぎて数年間、受身的同性愛者の生活を送った。幼少時から自体愛的空想に耽る習慣があり、受身的性役割への欲望に悩まされ続けたが、女性への羨望や女装への懼れは特に意識しなかったという。4、5年前からミニスカートの女性へ異常なまでの魅力を感じるようになったが、次第に魅力は嫉妬羨望の感情へと転じ、変性を冀うようになった。ただし、料理家事等の女性の社会的役割への嗜好は認められない。25歳で自殺未遂。全般的に抑うつ的な印象が強い。クラブで初めて女装した際には「本来の自分に還ったような」平静な気分であったが、男姿に戻った翌日には、回想と共に「外界との境が消失し、肉体が大気中に溶け出すような」陶醉感を味わったという。しかし女装から遠ざかって数日もすると、「男であるがゆえに周囲と和解せず、周囲の、特に同性からの攻撃に耐えねばならない」という緊張感が高まるとのことである。外出には最初は不安が大きく、看破されたこともあったが、最近はややく慣れた。入会前に比べ、変性への願望もかなり弱まったという。またはたち頃から詩作を始めたが、女装している時の方が詩想が流れるように湧くとのことである。

J. U. ——クラブ歴3年。22歳。学生。小柄、華奢、色白で、男装のままでも中性的美少年的魅力があり、「J子は女装しない方が可愛らしい」という皮肉も囁かれるほどである。ただしとりわけ肉体的に女性化の徴候は認められない。体育学を専攻しており、スポーツが得意である。女装への懼れは思春期の頃からといい、クラブへ来て初めて女装したが、たちまち花形のひとりとなった。男性の愛人もあり、受身的性生活を享受している。とりわけ *coitus per anum* を好み、バナナやソーセージで自慰をすることもあるという。かなり繁雑に外出するが、女装の露見したことはなく、またその不安も最近では殆ど感じないという。女装を好む最大の理由は「女の子の方が美しく見えるから」というものであり、耽美的ナルシズムの色彩が濃厚である。

* この場合の「女」とは、＜女役＞をも含めた意である。

趣味はスポーツの他、音楽、旅行、麻雀等であり、料理や家事といった女性の社会的役割への嗜好は別段見い出せない。また16歳の頃から少女趣味にあふれた詩や童話を書き始め、ガリバン刷りの自作詩集を街頭で売っていた時期もあるという。筆者もいくつかの詩作品を見せてもらったが、その中の一つのを記憶に頼って紹介すると——「紅や黄の美しい花々の咲き乱れる谷間にただ一本、灰色の花が片身せまく咲いていました。灰色の花は自分も他の花のように美しくなりたいと願って、蝶や風や空を往く鳥たちにうったえました。一羽の小鳥が町から口紅をくわえて来て、紅く美しく塗ってくれました。小鳥さんありがとう。美しくなったのね、そう言って灰色の花は顔を輝かせました——」だいたいこのような無邪気な内容のものであったと憶えている。

考察——服装倒錯・異性化願望・同性愛

序論においてすでに触れたように、欧米諸国における＜性逸脱＞研究の飛躍的な進展は、1950年代に遡られる異性化願望の＜発見＞と、服装倒錯及び同性愛からの区別の試みにうながされるところが大きい。いったいいかなる根拠をもって欧米の性科学者達は、これら3者を別個のものと見な

Table 1

S. O. S.	Gender Feeling	Kinsey Scale
Type 0 Normal sex and gender orientation	masculine	0 - 6
Type I Pseudo Transvestite	masculine	0 - 6
Type II Fetishistic Transvestite	masculine	0 - 2
Type III True Transvestite	masculine with less conviction	0 - 2
Type IV Transsexual, Nonsurgical	undecided wavering between Transvestism and Transsexualism	1 - 4
Type V True Transsexual, moderate intensity	feminine	4 - 6
Type VI True Transsexual, high intensity	feminine	6

すのであろうか。Benjamin (1966) は、性的な対象選択 object choice の方向を完全異性愛から完全同性愛までの7段階に評定して尺度化した有名な Kinsey 尺度 (K. S.) にならって、性的な同一化 identification の方向を7段階に表示しうる Sex Orientation 尺度 (S. O. S.) なるものを作成した (Table 1)*

表中、pseudo-transvestism とあるのは、定期的女装にまで到らぬ軽度の服装倒錯のことで、空想や文芸作品として楽しむにとどまるものをも含む。Type IV の Nonsurgical とは、異性化願望であっても手術の必要の認められない程度のもの、という意である。また、いうまでもないことであるが、Kinsey 尺度0が完全異性愛、6が完全同性愛を表示するものである。この表でみると、男性への同一化に全く支障の見られない Type 0 の者であって完全同性愛の者もいる一方、女性に近いアイデンティティの持主である Type IV の者ではほぼ異性愛 (K. S. 1) の者も居り、対象選択における方向と、同一化における方向とが、必ずしも合致するものでないことがはっきりするであろう。Figure 1 に K. S. と S. O. S. の相関関係を2次元平面にプロットしてみたが、等しく同性を性的対象として選択するという事実にもかかわらず、同性愛者と異性化願望者が、異なるグループへと截然と分たれてしまう有様が、これによって一目瞭然となるであろう。要するに同

* この表は原著の表を便宜のため簡略化したものである。

性愛とはもっぱら対象
 選択上の特殊性である
 のに対し、異性化願望
 者において中心問題と
 なるのは彼のアイデン
 ティティそのものなの
 であり、そもそも性欲
 的な動機づけの極度に
 低い者が多く、対象選
 択の問題は二義的なこ
 とに過ぎないというの
 である。これに対して
 服装倒錯と異性化願望
 の関係はさほど明確に
 区別しうるものではな
 く、連続的移行的であ
 る。異性化願望者も

Type III の真性服装

倒錯者もともども、女装によって「女になった」という感情を味わいかつ享受するのであるが、後者がもうそれだけで満足してしまうのに対し、異性化願望者は、単なる女装にとどまることなく、「正真正銘の女」たることをあくまでも追求し、転換手術を強要して外科医を悩ませ、時には性器自損に及ぶこともあるのである。この相違はとどのつまりは、服装倒錯者において自己の男性器がいまだ快楽の源泉たる意味を失っていないのに比べ、異性化願望者にとっては嫌悪対象以外の何ものでもない、という点に帰せられるであろう（Benjamin, 1954）。しかしながら、潜在的異性化願望と考えられる Type III はもとよりのこと、女性の下着や靴下等へのフェティシスティックな動機づけから発する Type II にしても、Type III を経て Type IV へと発展することがあり、根底に異性化願望の傾向を想定しなくてはならないという（Benjamin, 1966）。ついでながら、Benjamin の初期の協力者である臨床心理学者の Gutheil (1954) は、異性化願望者が「女になりたい」人びとであるとするならば、服装倒錯者は、自他の眼に「女として映じたい」人々と言えるとし、後者における鏡の重要な意味を、〈鏡コンプレクス〉の名のもとに強調している。

近年の性科学では、生物学的な複合現象である Sex と、その心理、社会的な習得される面である Gender の区別を、いささか煩わしいほどに立てる傾向がみられる。その詳細についてはここでは省略するが*、Stoller (1968) もこの区別にもとづき、常時女装し、転換手術を追求するとき強度の変性願望を示す者の中においてさえも、同性愛者、服装倒錯者、そして真の異性化願望者を識別することができるとする。すなわち真の異性化願望者とは、生物学的性 (sex) においては男性であるにもかかわらず、心理学的な性 (gender identity)** としては女性として自己を形成し終えてしまった人々であり、おのれの sex を gender に合わせて修正しようとして転換手術を

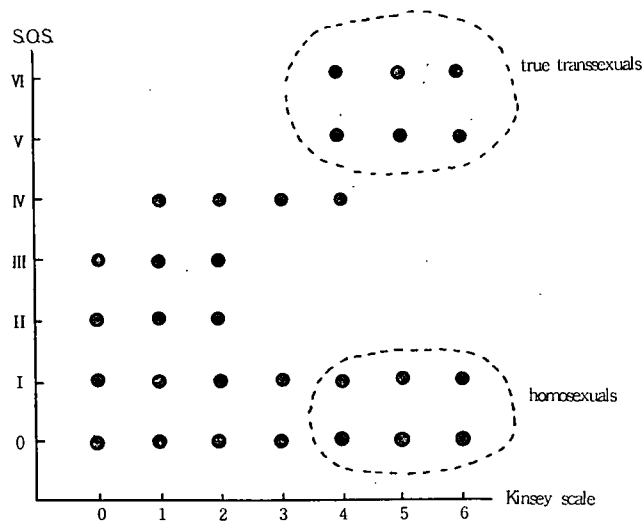


Figure 1

* Money & Ehrhardt (1972) 参照。

** sex と gender の区別に応じて、従来主として精神分析学者によって用いられて来た、sexual identity (性同一性) の語は、gender identity によって取って代られつつあるが、内容自体にさして変更があった訳ではない。gender identity には未だ定訳がなく、性別同一性とも訳されるが、最近朝山新一氏によって性自認の訳語が提案された。(朝山, 1978)

望み、かつ、女性として異性愛の男性に愛されようとする。服装倒錯者は、性的動機づけ (sexual motivation) の面では男性的であり、妻や恋人を持つものも多いが、gender identity の内部にジキルとハイドのごときふたつの部分を共存させ、男性アイデンティティと女性アイデンティティの間を行きつ戻りつしている。転換手術の実施は、後年の後悔を結果することが多いであろう。最後に同性愛的女装者には、gender identity に基本的な障害はなく、彼に女装癖と変性への願望があったとしても、強力な男性に愛されたいという性的 sexual な感情から派生したものに過ぎず、手術の実施はいよいよもって適当ではない。

現在までの服装倒錯研究の集大成ともいうべき Brierley の Transvestism (1979) では、女装癖は、同性愛的女装、フェティシスティック女装、露出症的女装、異性化願望的女装、服装倒錯的女装の5型に分類されている。うち露出症的女装とは、何ら自他の眼に女性として映ずることを目的とするものではなく、部分的な女装姿を異性に誇示することによって、通常の露出症者の性器露出と同様の性的攻撃的欲望の充足をはかるものである。同性愛的女装と異性化願望的女装については Benjamin とほぼ同様の見方をとるが (序論3頁参照)、フェティシズムからする女装者をフェティシストの範疇に入るものと見なし、服装倒錯者とは異質的なものとしている。^{*} すなわち、女装の快感をそれ自体として追求する一群からフェティシスティック女装者をさし引いた部分にのみ服装倒錯者の名をあてることを主張するのであるが、この意味での狭義の服装倒錯者とは、異性化願望者が全面的に女性へ同一化してしまっているのに対し、男性的と女性的とのふたつのアイデンティティ部分を共存させており、それゆえに間歇的に<女性>として生きる期間を必要とするのだとして、前述の Stoller の説を踏襲している。

次に成因論に入るが、まず、もって生まれた生物学的な性 (sex) から、必然的にそれと同一方向の心理学的性 (gender identity) が発展するとは限らぬことはすでに定説になっているようである。生物学的に何ら欠陥のない男 (女) 児を、女性 (男性) アイデンティティの持主として育てあげることが可能であり、またいったん男 (女) 児として下された性別判定を覆して、女 (男) 児として再判定してその通りに育てあげることも、2歳以内のことであれば可能である。ただし心理学的性分化に関する臨界期というものがあるが想定され、この、母国語習得に関する臨界期と一致すると想像される時期を過ぎると、gender identity は変更不可能となってしまうと言われる (Monty & Tucker, 1975)。それゆえ異性化願望者とは、gender identity 分化の過程において何らかの影響にさらされ、生物学的性とは反対方向の心理学的性へと押しやられて引き返すことができなくなってしまった人々であり、服装倒錯者は、その途中の段階にとどまり、男性アイデンティティと女性アイデンティティとの間を揺れ動いている人々であると想定することができるのである。この影響力の正体は何であるかであるが、これについては定説がない。異性化願望者の中には、両親が本当は女兒としての出生を期待していたとか、女兒の服を着せられて育ったとか、父親なしで婦人に囲まれて育てられたとか、唯一人の男児として姉妹の美しい服装をいつも羨んでいたとかいった身の上話をする者が多く、不適当な家庭環境にもとづく心理的原因が考えられるが、Benjamin (1964, 1966) は、この種の外傷体験は正常者にも往々にして見られるところであると見て、全てを心因に帰するのには消極的で、生得的な体質といったものを合わせ考えなければならぬと説いている。これに対し Stoller (1969) は、異性化願望者の家族歴には、両性的 bisexual 母親と受動的で不在がちな父親の組合せという、共通した要素が見られるとし、母親との過同一化にもとづいた心因説を展開している。ついでながら異性化願望の男女比であるが、男性における発生率は女性の2~8倍とされ、圧倒的に男性に多発するという点では諸報告が一致している。

^{*} 上着よりも下着に女装の欲見を見出すこと、新品よりも既使用の下着を好むこと、この2点でフェティシスティック女装者は服装倒錯者から区別されえんとする。

(Panly, 1969b). かかる著しい性差の原因についても、やはり生得説と環境説とがあるようである。服装倒錯については、Benjamin は前述したようにフェティシズムと潜在的異性化願望の重なり合ったものと見るが、その成因論は異性化願望の場合と大差はなく、Stoller (1968) も、男根的女性 phallic woman である母親との同一化を基本とした、異性化願望の場合に類似した家族内力動関係による説明を試みている。また Buchner (1970) は、7名の服装倒錯者とのインタビューにより、transvestic career path なるものを作成しているが、それは、性動因の低さと攻撃性の欠如という生物学的素質を基底とし、婦人衣類へのフェティシズムの出現、近親女性への同一化、等々を第一段階、異性愛の男性としての不適格さの自覚がなされる第2段階、機会の欠乏や社会的禁圧等によって同性愛への吐け口のふさがれる第3段階、等々と続く極めて複雑なものである。

以上ほんの一部分を紹介したに過ぎないのであるが、かかる現代性科学の知見に照らしてみるならば、われわれのCクラブにおける女装者の生態の意味にも、相当程度解明の光が投げかけられることが期待できるであろう。そもそもCクラブの〈女性会員〉とは、いかなる意味での女装者なのであろうか。われわれが何らかの形でインタビューの対象となしえた27名の会員に限って云うならば、全員が完全女装を旨とし、自他共に女として映じかつ「女になった」という感情を味わうことを主要な動機とすると判断されるがゆえに、まずフェティシスティック女装や露出症的女装の可能性は省かれる。では異性化願望的女装についてはどうであろうか。なるほど彼らの大多数が、「女はいい——女に生まれたかった——女になりたい」等々と、公然もしくは暗黙の表明をする。しかしながら異性化願望の特徴とされる (Benjamin, 1966), たえず性転換の現実的可能性を追い求め、絶望するや往々にして性器自傷や自殺にまで導かれるところの強烈な「正真正銘の女」への変身願望は、これら会員中にあっては疑わしい1, 2例を別としては見ることができないものであった。また、いまひとつの主要特徴とされる、料理・家政・妊娠・育児等の女性的社会的役割に対する羨望と嗜好も、これまた疑わしい1例を除いては、さほど顕著なものではないのである。彼らの多くは男性として別段不思議のない関心と嗜好の持主であり、女装したままテレビのナイター中継にかじりつき、マージャンに夢中になり、強いアルコールを嗜むのである。挙措動作も「おしとやか」には程遠い者が大部分であり、筆者は正直のところ、予想していたよりも〈男性的〉な女装者の気質発露ぶりに、いささか面くらった程であった。異性化願望とは、3万人に1人とも10万人に1人とも云われるまれなケースであり (Pauly, 1969a), また異性化願望者が服装倒錯者の下位文化中に流入している割合は5%以下という説もあり (Benjamin, 1966), 確率の低さから云って偶々出遭えなかったに過ぎないと考えられないこともないが、なおかつ次の点を指摘しておかなければならないであろう。すなわち、Cクラブが初心者への懇切な入門指導を特徴としているグループであるのに*, 異性化願望者はすでに思春期前より周囲にそれと気づかれるほどの徴候を示す者が多く (Benjamin, 1964, Pauly, 1969a), それゆえ成人する以前にすでに、あらゆる困難を克服して〈熟練者〉となってしまっており、女装クラブの如きものを殊更に必要としないのだと想像されるのである。それではいったいわが国においては、真の異性化願望者はいかなる場所に自己実現の場を見出し出しているのであろうか。推察するにそれは、東京ならば上野近辺を中心としてこの20年ばかりの間に著しい発展を遂げた、ゲイバー、女装バー街の中においてであろう。もとよりわが国は明和安永の頃、江戸市内だけで数十軒という蔭間茶屋が、二百数十人の女装の少年を擁して繁盛していたという伝統をもつ (岩田, 1973)。天保の禁令、明治以降の急速な西洋化と近代化の進展、そして戦後もっぱらアメリカ文化の影響により異常なまでとなった異性愛礼賛の風潮と、う

* ちなみにCクラブの某誌への宣伝文は、「あなたも女装できます。初心者完全指導……」という文句で始まっている。

ち続く打撃と禁圧にもかかわらず、同性愛者の世界における女装の麗人への嗜好がけっして絶えることなく続いているのを、今日われわれはまのあたりにすることができるのである。それゆえ、かかる〈伝統〉をもたず、女装拒否の傾向の強い同性愛者の下位文化からも排除されお互いに孤立し、困難と闘いつつ女性として職に就いている者も多いという欧米諸国の異性化願望者に比べ、正体露見の不安に脅されることもなく、ゲイボーイという〈偽女〉の境涯自体には不満足であったとしても、手術のための経済的準備にはむしろ便宜な生活の場にわが国の異性化願望者は恵まれていると云えるのであり、まさにかかる緩衝地帯の存在こそ——法律問題の不在という事情に加えて——精神医学や臨床心理学の網の目に彼らの姿が容易に捉えられない理由とも考えられるのである。

では、Cクラブの会員中に異性化願望の範疇に入れうる者が、疑わしい1, 2例を除いては見い出せないとして、彼らはもっぱら服装倒錯者と見なされるべきであろうか。この点を検討するために、Feinbloom (1976) によって報告された、アメリカにおける服装倒錯者の組織〈Argus〉に関するフィールドワークを参照してみよう。彼女は服装倒錯者を同性愛的と異性愛的とに分ち、Argus は後者のグループだという。同性愛的服装倒錯者とは、他の同性愛者に自分の存在を知らしめる性的な信号としてか、もしくはナルシスティックに自分を飾り立てるために女装する者であり、女装そのものが目的なのでもなければ女性として通用することを企てるのでもない。これに対し異性愛的服装倒錯者とは、女性の下着等への対象愛的フェティシズムから発し、「完全に装う」ところまで進展したものであり、女装自体が非常に大きな心理的効果を——若年者には陶酔状態を、年令の進んだ者には安らぎと解放感を——もたらすものである*。彼らは概して——両性愛的な者の中にも中にはいるにしても——同性愛者と見なされることを嫌うし、事実、Argus においては同性愛的行為は全く観察されなかった。また殆どのメンバーが結婚歴をもつか結婚準備中であり、父親となっている者も多い。妻が夫の女装趣味に気づいているにもかかわらず、黙認と許容とがなされているというメンバーも若干みられたが、そのような〈理解ある〉妻であっても、同性愛の徴候には眼を光らせているという**。

Argus はアメリカ最大の女装愛好組織〈phi pi Epsilon〉の大西洋岸支部であり、アメリカにおける服装倒錯者の下位文化の傾向を、ほぼ反映していると見てまちがいないまい。またそれは年令構成 (20代~60代)、職業 (男性の職業の多様さを反映、威信ある職種に就いている者も多い)、そして既婚者の多いこと等々の点で、われわれのCクラブと共通する特徴をも有している。しかしながらこと同性愛との関係になると、彼此の相異の大きさに驚かないではいられない。むろんCクラブの女性会員は、クラブが「女装者にあこがれる」男性会員なるものを合わせて募集していることは先刻承知であるにせよ、別段同性愛行為を期待して入会して来るのではない。入会直前の、緊張の極度に高まった状態にあっては、女装して変身の実感を味わいたいという願望にもっぱら支配されており、男性会員との関係如何にまで想像を及ぼすほどの精神的余裕もないのが通例なのである。機関誌の記事もクラブ内の性関係については沈黙を守っており、新入会員は、初めて男性会員の誘惑に直面して、意想外のこととして驚くのである。しかしながら驚きと同時に、「女になった」という実感を強め、以後は歓びをもってこれを迎えるようになるのが常なのである。——こうした男性会員との性交渉に加え、「レスビアンラブ」と称される女装者同士の交渉、また、女性会

* Feinbloom のいう同性愛的服装倒錯 homosexual transvestism と異性愛的服装倒錯 heterosexual transvestism とは、それぞれ、前述の Brierley (1979) の、同性愛的女装 homosexual cross-dressing と、服装倒錯的女装 transvestite cross-dressing にあたるとみてさしつかえない。社会学者である Feinbloom の見解は、Benjamin の説に依拠するところが大きいようである。

** かかる不可解ともみえる許容がありうる理由は、ひとつには、夫の女装がない限り夫婦間の交渉が不可能になってしまうところにあるようである。なお、Cクラブにおいてはかかる黙認許容は問題外であり、会員はひたすら妻への発覚を恐怖し続けるのである。

員であるにもかかわらず日によっては男姿のまま女装者を誘惑することもある〈両性者〉の存在、さらにはこうした両性者が、年令の進むにつれて男性会員へと転向してゆくという傾向等々、いったいこれら〈わが国固有〉の現象をどう解釈すべきであろうか。彼らの殆どが女装と女装による変身の享受とを動機として入会しており、かつ、女装のみによって大部分が恍惚感やリラクスの感情を体験していると推測される以上（18頁参照）、同性への性的誘惑を主要動機とする、いわゆる同性愛的女装の範疇に入れることは困難なことであろう*。にもかかわらず彼らの間には、Benjamin, Stoller さらには Prince (1957), Prince & Bentler (1972) 等の諸家のとぞって強調するとき、服装倒錯者における同性愛への拒否傾向、などというものは概して見られず、それどころか「女として愛される」ことは、「女として通用する」ことの必須の契機として溶け合わせられていると云ってもよいのである。なるほど中には男性会員には見向きもせず、クラブに来て、何時間もかけて化粧に耽り、鏡台の前でしばしうっとりとしただけでもうすっかり満足してしまい、あとは化粧を落としてさっさと帰宅へるだけ、といった女性会員もいることはいる。けれどもかかる同性愛拒否者はほんの少数例に過ぎず、他の会員からは変人扱いされるのが通例なのである。それゆえ、Cクラブがわが国の服装倒錯者の一般的傾向を反映していると考えられる限りにおいて**、わが国においては服装倒錯者を対象選択の面で異性愛的と特徴づけることは一般に困難なことであり、両性愛的な者が多く、同性愛的行為への抵抗は概してみられない、と結論することができるのではなかろうか。そもそも筆者には、Argus におけるごとき、「自分が同性愛ではないことを強調する」類の異性愛的服装倒錯者とは、同性愛——というより両性愛——への潜在的傾向を抑圧したままにいる人々とししか思われぬ。女装に加えて同性愛を実行するとなると、二重のタブーを犯すことになってしまうからである。わが国の場合この点大いに事情を異にし、前述したごとき江戸期からの女装の麗人好みの伝統をくむとみられる能動的同性愛者との接触によって潜在的同性愛が容易に顕在化され、同性愛の女役としての己れの新しい役割に順応してゆくことが可能であり、中でも女性化のさほど甚しくない者は、何らかのきっかけによってやがては男役へと転身してゆくこともありうるのではないだろうか***。

が、われわれの関心は、分類してみたり〈診断〉を下したりすることにはないし、また〈成因〉を探究することにもない。そもそも、異性化願望の同定と心理学的性分化の概念の確立とをふたつの引き金として、あらゆるタブーを乗り越えて進むかにみえる現代欧米の性科学の全貌に接するにつれ、その発展ぶりに圧せられると同時に、筆者はなおいくつかの根底的な疑問を覚えずにはいらなかったのである。おそらくは性科学の今日の発展に貢献するところの大であった研究者の多くが、本来生物学・生理学畑の出であるという事情もあずかっているであろう****。彼らには、〈患者〉に接して彼らの女装する理由を十分内面的に了解する努力を拭わぬままに〈診断〉を下し、〈原因〉を究明しようとする傾向がみられるのである。女装趣味における因果連関とは、腹痛と胃潰瘍との関係のような直接的なものではけっしてない。女装者は disorder of gender identity を

* 同性愛を主目的とする者のためにはまた異なる雑誌、異なるルートがあり、全く異質的な〈ホモセクシュアル・サブカルチャー〉へと通じている。そこにはまた「同性への性的誘惑を主要動機とする」同性愛的女装者も散見される。

** 会員数、初心者への配慮、営利性を去っていること、等々の特徴からして、この推定は十分根拠があるであろう。また、筆者の瞥見したいまひとつのクラブ（Bクラブ）においても同性愛は行われている。

*** この転身のきっかけとして、6頁K.O.の例でも判るように、年下の美貌の女装者との邂逅が往々にして見られるということは、同性愛の実行の、男性化への促進的役割を、ひいては精神性欲的発達の一段階としてのその必須の機能を示唆するものとして興味おかい。すなわち、同性愛の実行は、常識に反して、男性アイデンティティの強化に役立つと考えられるのである。

**** 目立って少いのは、精神分析学者からの寄与である。これは異性化願望の〈発見〉が、心理療法の無効性の主張と共になされたことと関係があるだろう。

起こしているがゆえに女装するわけでもなければ、母親に同一化して育ったゆえに女装するわけでもない。彼はまず何よりも、男装よりも女装の方が、もしくは男性であることよりも女性であることの方が、よい（＝価値が高い）と感じるがゆえに女装するのである。この特異な価値意識の構造とその発生とを十全に解明することなしに、また同時に、世の大多数の男性が女装者と価値意識を異にし女装を嫌悪するかにみえる理由をも合わせて考察するという手続きなしに、一方的に女装趣味の＜病因＞を問うということは、現代の性科学を前代のそれに、Freud (1953) をして「同性愛者を特異な一群として他の人々から区別しようというあらゆる試み」と皮肉を言わしめた古典期の性科学へと引き戻してしまう恐れがあるだろう*。なるほど Benjamin のような先覚者は、「私は、服装倒錯者は女性として受け入れられるあらゆる権利を有している、という Benjamin 博士の言に賛同する。それはデモクラシーにおける人格の自由の一部なのである」(Gutheil, 1954) といった協力者の言からも明らかなように、女装者の権利を擁護することにかけてはいかなる自覚的な女装者にもひけは取らないであろう。しかしながら女装の権利を抑圧しているものが当の＜デモクラシー社会＞である以上、社会に対し単純に＜デモクラシー＞をもって復権要求することが、十分効を奏するとは思えない。女性の男装には今日かくも寛容であるところの＜民主主義社会＞が、「人格の自由の一部」であるはずのこの無害なる趣味をただ男性においてのみに禁圧し、女装趣味者に対し、在ってはならないかのものごとく対峙するとするならば、それは必ずや隠れた＜原因＞のあることであり、原因の如何に応じて対策も立てられるはずのものなのである。それゆえわれわれは、いまや、Cクラブにおける観察を通じて得ることのできた知見を土台としてより一般的・理論的な視座へと進み、女装者の価値意識を内的に了解し、＜社会＞すなわち＜大多数の男性＞の側の反応の深層へと測鉛を下しつつ、今日ただ男性のみが異装タブーに屈しなければならないというこの奇々怪々な現象の依って来たとを究明するという方向へ赴かなければならない。

第 II 部

女性羨望の心理

フィールドワークの項ですで見たとようにCクラブの会員の多くが、入会に踏み切るまでのかなり長期間にわたって女装もしくは変性への切実な願望に悩まされながらも、空想する以外何ら具体的方策を試みなかったという経歴をもつ。が、彼らのその間の苦悩は、おのれの願望が充たされることがないという単なる欲求阻止と絶望とにのみ存するのであろうか。飢え、渇えてさまよう乞食の眼前に饗宴をひらく富者があるとすれば、飢渴の苦しみは富者への羨望へと、ひいては憎悪へと発展しはしないだろうか。ましてことは単純な生理的欲求ではなく、性欲から高次の社会的欲求までをも包摂した、非常に複雑な欲望現象である。他人に成り変わりたいという、想像力の働きを前提としたあの不思議な感情——嫉妬——の果たす役割は極めて大きく、それどころか嫉妬羨望なしには変身への願望もありえず、従って女装者の価値意識の解明とはまず何よりも、女性羨望の内面的了解でなければならないと言いうことができるのである**。

実際Cクラブにおいてもかなりの会員が、あるいはあからさまに、あるいは婉曲な仕方、＜ほ

* Freud の同性愛理論の卓越性は、異性愛をも自明のものとせず、「解明を要する問題である」として、同性愛的発達と同時的に説明せんとした点にある。これにない筆者は、＜正常＞な男性が女装しようとする理由をも、「解明を要する」と考えるわけである。

** 女装者における想像力の役割の重要さ、想像力の全く欠如した人間に女装趣味は無縁であろう。女装愛好者に高学歴者もしくは威信ある職に就いた者が多いという所見（4頁、12頁参照）も、この点と関係があるかもしれない。

んものの女性〉への羨望嫉妬を表明するのを、われわれは耳にすることができたのである。中には女性に対する憎悪敵対の感情をさえ、かいまみせる者もいる。ただし嫉妬の苦しみが頂点に達するのは多くは入会直前の時点においてであって、願望を実行に移すことによって、どうにもならない緊張状態からのがれ、苦悩も柔らげられるのが通例のようである。女装が似合わないという発見によってあらたな絶望に陥れられた U.Q.（7頁参照）のような人物でさえも、話相手を得、おのれの苦悩の普遍性に目を開くことによって慰藉を見出したことであろうし、まして〈花形〉となりえた会員の中には、女性への奇妙な同胞意識さえ形成されることのあるのが見られるのである。——それにしてもこの、俗に〈男性優位〉とされている社会にあって、いったい彼ら女装者の眼に女性の何がかくも羨望すべきものと映じ、また、男性というおのれの在り方の何がそれほどにも気に入らないのであろうか。ある者はキモノという「絶美」の芸術作品を、またある者はミニスカートのエロティズムを羨望する。性行為時における受動的姿勢を「楽だ」として羨望する者も居れば、女性の豊麗な肉体そのものを羨望する者もいる。さらには、女であるがゆえに街頭や職場で〈チャホヤされる〉という現象に、「女は得だ」という言い回しで羨望を表明する者もいる*。だが、個別的な表現型にかかずらうのは措くとしよう。女装者の多様な言い分に注意おかく耳を傾け、かつ本質的なものを見のがさぬ直観力を備えてさえ居るならば、それらの裡に幾つかの羨望の焦点とも言うべきものを指摘することは、いたってたやすいはずである。われわれは、Cクラブでの知見を土台とし、欧米の諸研究、そして同時代の文芸作品にまで広く資料を求めることにより、かかる羨望の焦点を幾つかの項目にまとめてみることができた。すなわちそれは、〈美〉、〈視線客体性〉、〈受動的エロティズム〉、そして〈对人的依存性〉の4項目である。

実際、美しくなりたい、〈美〉そのものでありたいという願望は、いかなる女装者にも判然と見られるところであり、女装趣味者とはある意味で美にとりつかれた人々であり、美をあらゆる人間の価値の中で最高のものと見なす、唯美主義者中の唯美主義者と言っても過言ではないのである。たとえば N.X. は、和装を「絶美」と見なすがゆえに女装するのだし、J.U. にいたってはより率直に、「女の子の方が美しく見えるから」女装すると告白する。また欧米の性科学者の中でも、Prince のような自ら女装者でもあるような人物は、女装愛好者は「美を経験したいという欲求に動機づけられて女装するのである」（Prince, 1967）と断言する。しかしながら、かような女装趣味者——なかんずく女装愛好 transvestism の範疇に入る人々——における美意識の非常な比重が、諸文献において、服装倒錯者のナルシズム的な特徴として記述され（Lukianowicz, 1959; Benjamin, 1966; Buhrich, 1978）、またこの面が特に顕著であるような女装趣味者が、ナルシズム的服装倒錯者（Gutheil, 1954）等として分類されたりするとき、われわれは、ナルシズムという精神分析学上の術語が、美を求め美に憧れる女装者の心理の了解と追体験とを妨害し、問題のそれ以上の深化をかえって不可能にしてしまうという、心理学的術語使用の通弊が生じるのに気づかないわけにはいかない。のみならず女性はいくら美しく装ったとしてもレッテルが貼りつけられることはまずないのだし、たとえナルシシスト呼ばわりされたとしても、ナルシズムが女性の専売特許であるかの如く言説する社会通念に救われて異常視されることはないのであるから、かかるレッテル貼りはいよいよもって公平ではない。今日女子砲丸投げの選手や女性の物理学者が何ら特殊視されぬ以上、体力や知力において秀でたいという欲求と同様、美しくありたいという欲求をも男女を問わず人間として自然な欲求として承認する処から出発するのでなければ、科学

* この場合、女が得に見えるのは、管理職等の〈重要な〉ポストが多く男によって占められているという、男性支配社会の構造に由来する錯覚にすぎない、といった、直ちになされるであろう反論と説得とは、女装者には全く通用しない。彼らはそもそも、支配欲を満足させる類の〈重要な〉社会的役割などというものには何ら関心がないからである。

の名をもって社会通念を語り、無意識の性差別（男性差別？）を実行することになってしまうであろう*。ところでわれわれの現代社会が、こと美に関しては著しい女性優位の社会であることは、だれの眼にも明らかなところであろう。しかしながら前の論文ですでに論じたところであるが（渡辺、1979）、女一男の美の優劣とは、身長や体力・知能の優劣のごとき測定可能な事実にかかわる客観的判断なのでは毛頭ない。近代市民社会にあっては、女性の美が前代にも増して尊重され称揚される一方、男性の美は無用とされ、それどころか男性は美しくあってはならないとする不可視の権力が、われわれの内面を規制し支配し美意識を根底から条件づけているのがみられるのである。このことは、今日街頭で見受けられる女性の服装が、あらゆる面でいやが上にも美を際立たせるようにとも巧みに工夫されているのとは対照的に、男性の服装が、美的な要素の全面的な排除ということを基調として組み立てられているかに見えることから、十分裏書きされることであろう。かかる不公平、〈不平等〉な社会にあって、生来美的な感受性に恵まれた少年が、成長するに従い、自分は美しくもなければ美しくあってもならない方の性に属しているのだということを、ことあるごとに思い知らされ、深く心を傷つけられないとしたら、それこそ奇妙なことと言わねばなるまい。一般にはミステリーの作家としてのみ知られる横溝正史の初期の小品『蔵の中（1975）』は、かかる、美を求めるがゆえの変性願望とでもいうべきものの、好箇の例を提供する。

「ある日私はふと思いついて、お店からこっそり持って来た白粉や眉墨で、自分の顔をさまざまにお化粧してみました。冷たい白粉の感触が爽やかに肌にしみ透って、その時ばかりはさすがの私も、この世の憂さを忘れ果てたかのような、楽しいときめきを感じましたが、さていよいよお化粧も終わって、鏡のなかに写し出されたわが顔を、改めてつくづくと見直した私は、思わず感歎の声を放たずにはいられませんでした。ああ、何という美しさ、艶めかしさでしょう。この蔵の中に蓄えられている数多い錦絵のなかにも、こんな美しい顔が果たして画かれてあるでしょうか。私は軽く微笑んでみます。おちょぼ口を作ってみます。ながし眼を作ってみます。眉根に皺をよせて憂い顔をしてみます。そうしていやが上にも美しい表情を工夫しては、時の経つのも忘れて楽しんでいましたが、そのうちにこれではまだ満足出来なくなって、長持ちの中から、姉の形見の振り袖を取り出すと、それを自分の身につけて見ました。さやさやと鳴る紅絹裏の冷たい感触が、熱っぽい肌をなでて、撫るようなその快さ、……（略）……私はしばらく驚異の眼をみはって、茫然としてこの美しい、一種異様な怪物の顔を見守っていましたが、そのうちに何とも言えぬほどの寂しさにうたれました。ああ、私は何だって男になど生まれて来たのであろう。女に生まれていたら、毎日こうしてお化粧も出来、色美しく肌触りのいい着物を着てくらせるのに、男に生れたばかりに、こんなゴツゴツとした、くすんだ色の着物よりほかに着ることも出来ず、お化粧をするわけにも参りません。何という勿体ない事であろうと私は思わず、ふかい溜め息をつくのでした……」

それゆえ、美にまつわる女性への羨望の出現を、以下のような命題によって図式化して示すことは、許されることであろう。

〈私は美しくありたい。男（装）よりも女（装）の方が美しい。ゆえに私は女性を羨望する。〉**

第二の羨望項目たる〈視線客体性〉とは、われわれの社会においてとりわけて顕著な、女性ももっぱら男性の視線対象としての存在仕方をし、その逆ではない、という現象をいう。

* ナルシシズムが女性固有のものであると見えるとしても、それは、今日ナルシシズムがただ女性においてのみ公然の発露を許容されている、ということに過ぎないのである。男性におけるナルシシズムの禁圧は、おそらくは女装タブーと同一の根を有する。

** 前の論文（渡辺、1979）でも触れたように、同性愛にあっては美にかかわる価値意識は本質的な契機をなしているが、そのあり方は女装趣味の場合とはいささか異なるであろう。すなわち、自分の上にであれ相手の上にであれ女装が実現されるのを好まぬ同性愛者——大部分の同性愛者がそうなのであるが——とは、男性はありのまま、男装のままでも、美において女性に劣ることはない、という美意識を確立しえた人々であると、考えることができるのである。

「己の知っている限り、女は見られるためにある。それは見られたがっている物、謂わば石とか骨董とか置物とかいうのと同じだ。」（福永武彦『夜の三部作』1969）

かかる、女が視線の対象、〈見られるもの〉の側に回る一方、男がもっぱら〈見るもの〉としての役割を荷うという役割固定が、何ら男女の人間の自然に根拠をもつものではなく、文明の近代化過程に固有の現象と考えられること、さらには、〈見る〉行為必ずしも能動的行為とはならず、〈見るもの＝視線主体〉が〈見せられるもの＝行為客体〉に転じるという逆転が容易に生じることについては、すでに前の論文において指摘したところであるので、ここではそれらの論点をくり返すのは避けるとしよう。当面のわれわれの目的のためには、視線の対象たることから注意深く身を遠ざけ、全面的に見る側に回ることによって 能動性・主体性を防護しようと 信ずる近代人男性が*、実際は、けっして視線を向けられなくなってしまったまさにそのことによって、深い部分で欲求不満と不幸感とに悩まされていることを示すだけで十分であろう。

「その頃、私はかなり平凡に暮らしていた。私を見る人はなく、見ようとも思わない。」（秋山駿『私は一つの石塊を拾った……』1967b）

実際、さしたる社会的地位もなく、かつ人眼を引くほどのさほどの特徴も持たぬ大多数の男性にとって——彼が大都市で孤独の生活を送っていればなおのこと——見られるという経験はかなりまれと言わねばならないだろう。街頭で注視の対象となることなど男であればまずありえないことなのだし、劇場や美術館はいうに及ばず、彼が学生であれば教室でも、彼は常に〈見る〉側であり、街を歩めばなおのこと、そこそこに貼られた 広告ポスターの中に 微笑する 美女たちの 肢体を〈見る〉役なのである。日々刻々、彼に割り振られた役目とは、単に見ることに他ならず、こうして無限に〈見る〉行為をくり返しているうちに、彼はついには、〈見る〉こととは〈見せられる〉ことに過ぎず、もっぱら〈見るもの〉であることは己れのふかい受動性を、また度しがたい脇役性を意味するに他ならないことを悟るのである。おまけに困ったことには現代人の多くは内側から彼を凝視める眼を、〈超越者〉の眼を、〈超自我〉の眼をさえ持たず、それゆえ見られることの唯一の途はただ、現実、に、個別的な他人に視線を向けられることにしかない。何とかして見られたい、見られたいという仕方では〈見せるもの〉となり、〈行為主体〉となって自分自身の存在を確かめたい——かかる、見られることを通じての存在証明 identity への要求は、長い間充たされぬままにあればある日突然に爆発して、一見理解しがたい反社会的な行動をさえ惹き起こすことがある。彼は犯罪者、殺人者となってまでも見られたいのだ。

「夕刊の新聞を大急ぎでひらくと、案の定、社会面のトップに出ている。……雲も月も星も、全部が注視している、みよ、この偉大な力、すばらしい勝利、輝く勝利、赤い顔。」（小松川女子高校生殺人事件犯人季珍宇の手記、鈴木道彦『日本のジュネ』1967より引用。）

「わたしが弁護した善良な犯罪者のうち、幾人かは同じような感情に従って人を殺したのです。この連中の置かれていた暗い環境では、新聞を読むこと、たぶんそれが一種の不幸な報いをもたらしたんですよ。多くの人々がそうですが、彼らは自分が無名であることに耐えられなかった。こうした不満が、いくらかは彼らを傷ましい結果に追いやることになったのかもしれませんが、有名になるには、要するに門番を殺さなければいい。」（カミュ『転落』1956）

これに対して女性の場合はどうか。思うに、男性のそれとは対照的な女性における服装の著しい華美と多様性とは、単に〈美〉の強調という機能をもつのみではない。それは人々の視線と関心とをひきつけ、一様な群衆の中から彼女を浮かびあがらせることによって、「無名であること」の苦し

* この信念の哲学的表現が、Sartre (1946) の〈視線の哲学〉に他ならない。

みをやわらげるといふ役割をも果たすものなのである。男性の服装にはこのような機能はない。灰色を基調とした画一的な今日の男性の服装は、街頭にあっては無名の群衆の壁の中へと彼を塗り込め、職場にあっては単なる労働機能の束へと彼を還元せしめ、彼からその肉体的現存性を剥奪し、彼を透明人間に化せしめてしまうところの隠れ蓑に他ならないのである。通行人の眼をそばだたせることは、女性にとっては社会的成功を意味するが、一般の男性の場合は＜変なやつ＞の証明に他ならず、名誉失墜の危険へと直結するものであろう。黒人文学の旗手として知られる Ralph Ellison の代表作の標題「見えない人間 Invisible Man」(1952)とは、単にアメリカ黒人にとってのみならず、無名の群衆の一人として生きる今日の大多数の男性にとっての存在の状況を象徴する語としても、ふさわしいものであろう。

「僕は不可視人間だ、といっても……(略)……僕の姿が見えないのは、ひとが見ようとしなからだけなのだから、そこをところを理解しておいてもらいたい。」(Ellison, 1952)

「あいつの言葉が胸を刺した。若い無邪気な娘が心要であるようには、私という人間はこの世の中に必要ではない、と、その言葉は私のことを言ったのか？」(秋山駿『抽象的な人間』1967a)

それゆえ、「見えないこと」の苦しみに苛まれた若い男性の中には、犯罪者への途とは異なる途を辿る者もいるであろうことは想像するに難くない。ある日彼は街頭で、ひとりの若い女とすれちがう。彼は女を見、同時に、他にも多くの視線が女に向かうのに気づく。女がとくに美貌だからというわけでもない。恐らくはあらゆる面で人々の視線をひきつけるように、巧みに装っていたのであろう。それでなくとも若い女にとって、見られるという体験は、さほど稀とはいえないのであるまいか——彼の内部で壊れるものがある。呪われた欲望が頭をもたげる。「僕モ女デアッタナラ、見ラレルコトハ容易ダッタダロウニ」

かくして——

＜私は見られることによって存在証明したい。見られるのは女である。ゆえに私は女性を羨望する。＞*

第3に取り上げるべきは、女性の受動的エロチズムへの羨望である。この点に関してわれわれは、真実のところ男性と女性のいずれがより多くの性的快感を体験するかという、古来からある難

* ここで付け加えておいてよいと思うが、現代の女性の服装上の長所は、単に＜美＞と＜視線客体性＞の面に尽きるのではない、われわれはいまや、女性の服装が、今日あらゆる面で男性のそれに比べはるかに優秀なものになりつつある、という事実、率直に目を向ける必要があるのである。Beauvoir は『第二の性』(1946)の中で、「女の服装をすることはほとんど不自然なことではないのだ。なるほど男の服装も人工的ではあろうが、その方がずっと簡便である。」と論じたが、35年後の今日、男女のこの状況は完全に逆転した。注意ぶかい観察者ならば、ここ4分の3世紀にわたる女性の服装革命の本質が、歴史上の男性の服装のあらゆる長所をとり入れつつ、女性の肉体を全面的に解放する方向に向かうところにあることに気づかされるだろう。ヴィクトリア朝偽善道徳時代の重苦しさからさして進歩しているとはいいがたい男性の服装とは対照的にいかにも軽快な今日の女性の服装は、単に外側からそう見えるばかりではない、われわれのCクラブにおいても、初めて女装した会員の口から、女性の服装がこれほど解放的にできているとは思わなかった、男の服の窮屈さがよく分った、といった感想を聞くことは稀ではないのである。また、多少なりとも服装の歴史に通じた者であれば、現代の女性のファッションが、伝統的女性のロングスカートに加え、スコットランド男性のキルト(=膝までのスカート)、ギリシア男性の短衣(=ミニスカート)、さらには中世貴族のキュロット(=ホットパンツ)までも取り入れた、極めて幅広いものになって来ていることを、容易に指摘できるはずである。否、そればかりではない、現代の女性の服装は、同時代の男性のその最も男性的な特徴——長ズボン——をさえも、公然と同化することができるのである。このように、今日、服飾史上最も融通無礙なものになりつつある女性の服装の進歩が、女性における＜服装倒錯＞の概念を無意味なものにし、女性の＜服装倒錯者＞をわれわれの社会から事実上＜消滅＞させてしまったというのも、けだし当然のことであろう。

間に逢着することになる。これに対するわれわれの社会の回答は、〈美〉に対するのと全く平行的なものである。

「京子の眼が、白く濁り、そのくせその底に粘り付くような強い光が現われて来た。その光と彼は対い合い、自分の眼にもその光が現われているかどうか、と気懸りになった。彼は鏡に眼を映し、その眼の中を覗き込んでみる。濁った、激んだ眼だ。しかし、京子と同じ光はそこには無いようだ。事実、そのような光は現われていないのだから、と彼はおもふ。何故ならば、紐が一本ふえる毎に、京子は確実に快感を掴み取ってゆく。

京子の顔は、歪んだまま光に満ちてゆき、一方彼はしばしば取残されてしまう。取残された彼は、むしろ京子に羨望を感じ、すぐにその羨望を打消し、この情況から何とか抜け出さなくてはならぬ、と苛立ち焦りながら考える。」（吉行淳之介「砂上の植物群」1967）

「だが一度その中枢部に近づこうとして、薔人は再び呆気に収められた。これはまさしく灼熱の熔岩に爛れた噴火口に近い、男とは比較にもならぬ恍惚感の中を漂いながら、女はまだその頂上の十分の一も極めていないのだ。（中井英夫「薔人」1976）

かかる女性的受動的性感優位の神話に対しては、自ら経験する他ない内的なるものを、相互に量的に比較することにそもそも意味があるのか、という疑問が直ちに提起されうるのであろう（たとえば、渋谷、1977）。だがこの神話は、より客観的にして〈科学的〉でさえもある外見を与えるいまひとつの説、男性の性感帯は性器周辺に局限されるが、女性は耳たぶから足のつま先まで性感帯である、という今日の通念によって補強されている。女一男の性感の優劣は、性感帯の面積の大小という一見客観的に比較可能な次元へとひきうつされることによって、一層の真実らしさを帯びるに至っているのである。

「性感帯は女性の場合はじつにたくさんあって、その肉体全体を性感帯と考えることもできるほどだ。」（Beauvoir, 1949）

が、これもまたいまひとつの神話に過ぎない。この神話は、本来心理的な存在であるはずの〈性感帯〉というものを、生理的解剖学的に実体化し、局在化するところから生じているのである。Freud (1953) は、「任意の皮膚や粘膜は、いずれも性感帯の役を引き受けすることができる」という、男女の別を越えた 幼児期自体性愛 autoerotism の主張の上に、その性心理学的全体系を構築した。それゆえ、一方で性器に局限された男性の性感帯という通念を受容し、他方で Freud の性発達理論の大枠を承認とするならば、論理的帰結として、発達の途上で男性の性感帯はその大部分が、女性とは異なる何やら生物学的宿命のようなものによって〈死滅〉してしまうという、ありそうもない想定をする必要が出てくるのである。なるほど感覚心理学は、皮膚表面の弁別能力において平均して女性の方が秀れている、というデータを提供してくれるかもしれない。だが平均値とはあくまでも平均してのことに過ぎないし——女性の平均よりも感覚鋭敏な男性はいくらでもいる——また触覚の鋭敏さがそのまま性感に転じるというわけでもあるまい。加えて大多数の男性にとって、幼児期を別にすれば受身的に愛撫されるという経験が稀である、という事情をもここに指摘しておく必要があろう。性感帯とはもともと他人の手によってしか十全に開発されえないものであるのに、女性は一般に相手の男性を愛撫するのに必ずしも熱心ではない。また、たとえ偶々「感じる」ことがあったとしても、多くの男性はこの思いがけない快感を、「男らしくない」としてしりぞけてしまい、それ以上意識的に追求しようとはしないと想像できるのである。それゆえわれわれは、女性と等しく男性も、「耳たぶから足のつま先まで」性感帯であるのに、成長の途上でその大部分の領域が、心因性冷感症とでもいうべきものによって抑圧され、凍結されてしまったのだと主張すべき、十分な根拠を有しているのである。思うに、豊かな官能性と皮膚感覚の鋭敏さとを兼

ね備えた若い男性であれば、自分自身の全身の性感帯に気づくことはさして難しいことではないはずである。かかる若い男性が、もっぱら相手を受撫するにとどまり愛撫し返されることの稀な男性としての性役割に満足できず、おのれのエロチックな可能性のすべてを実現せんと望むようになることは極めてありそうなことであり、また、そのためには「女であった方がいい」と考えるようになることも、十分了解できることと言わなければならない。それゆえ――

＜私は性感を全身的に実現することを欲する。女のみが全身の性感を実現しうる。ゆえに私は女を羨望する。＞*

最後に、羨望の第4項目である＜对人的依存性＞について一瞥することにするが、これは、受動性の性的側面たる＜受動のエロチズム＞に対して、社会的側面とも言うべきものである。周知のように近代文明社会は、自由、自立、能動といった一群の価値を、他の諸文明にはその例を見ないほど強調し称揚する一方、徒順、依存、受動といった性質には著しく蔑視的な社会である。この傾向はとりわけ男性間にあって甚しく、従順で依存的な男性は「めめしい」とされ、受身的男性は神経症患者の代名詞のごとく扱われてしまう。他方、女性においてはこれらの属性は女らしさを傷つけるものでは何らなく、なかんずく日本のような近代化の歴史の浅い社会では、女性の美質とさえする伝統的気風が、色濃く残っているのである。女であれば親に依存し、恋人に依存し夫に依存し、職場にあっては上役に依存することさえも許される。仕事の上での失敗も「女だから」ということで大目に見られることが多いし、物おじしたり、頼りなげな風情を見せたり、いざとなれば人前で泣いたりすることさえも、さして名誉を傷つけることにはならないではないか――。依存的受身的傾向が強く、支配性・攻撃性を欠いた男性が、かく考えて女は得だ、気楽だ、と羨望し、男として社会に生きることを苦役のように覚え、ついには女性への化生を冀うようになったとしても、とりたてて不思議なことではないと言わねばならない。Cクラブにおける女性会員の、「男であるがゆえに周囲と和解せず、周囲の、特に同性からの攻撃に耐えねばならない、という緊張」(7頁参照)とは、いわば強制された自立性・能動性への依存的受身的男性の、かかるふかい異和の念の表明に他ならない。

それにしても、われわれの近代社会がかくも強調し称揚するところの、自由・自立・能動性といった諸価値は、人間性に立脚するものとしてそれほど自明なものであろうか。依存と受動性への欲求は、果たして Beauvoir (1949) の力説するように、「至高の自由でありたいと欲する主体の真正の要求」に対して、「自己放棄と逃避の非真正な欲求」として一方的に蔑視され、断罪されなければならないものであろうか。この点に関しては別の機会に回すこととして、当面以下のことに注意をうながしておくこととしよう。すなわち、われわれは男女の別を問わず幼児期には養育者に全面的に依存した生を営んでいたのであり、いまだ愛することを知らず、愛されることのみを追い求めていたのである。土居 (1965) の甘えの理論、Balint (1965) の受身的対象愛の説は、いずれも、依存への欲求、「愛されたい」という受身的欲求が、他のもろもろの対象関係に先行する第一次的なものであることを強調することによって、幼児の依存と受身の状態に関するわれわれのこの常識へ、理論的支柱を与えるものであっただろう。それゆえ、前の論文ですでに触れたところであるが、对人的依存と性的受動性が当然視される女性のアイデンティティに比べ、それらを厳しく退けることを条件とする男性のアイデンティティは、獲得するのに一層困難なものにならざるを得な

* この意味での女性羨望は初期の段階では、女装よりもむしろ受身的同性愛の行為へと導くものであろう。しかしながら、M. R. の場合に見られるように (7頁参照)、女性羨望の発展に伴ない女装愛好者へと転身してゆくことも十分起りうることである。

い*。この意味において男性とは女性以上に人工的産物なのであり、第Ⅰ部で言及したように（10頁参照）、男性にあって異性化願望が女性の2～8倍と多発するという報告がなされるのも、当然と言わなければならないのである。幼児期という出発点にあっては同等であったものが、進んで行くうちに一方の途が他方よりも険しくなっていくのであれば、容易と見える方の途へ移りたいと願う少年が出てくるのは、全く自然の結果ではないか。かえって、このような事情にもかかわらず世の男性の多くが女性羨望に陥ることがなく、Cクラブのようなクラブが入会希望者の殺到に音をあげるといった事態が生じないのかということこそ、むしろ不思議と言わなければならないのである。それゆえ――

〈私は依存したい。依存が公然と許されるのは女性である。それゆえ私は女性を羨望する。〉

女装のタブーの深層

以上長々と述べて来たように、女装者にとっての女性羨望の焦点と考えられうる、〈美〉〈視線客体性〉〈受動的エロチズム〉等々、今日もっぱら女性の独占するところと見なされている諸属性を詳細に検討してゆくならば、それらに対する羨望が、単に正常心理として完全に了解可能であるのみならず、ひとつひとつがいかにももっともなものに思われて来ることに気づかされるであろう。これらの羨望項目のうち、美と視線客体性への羨望が、女装の常習化を通じて欧米の性科学者の言うところの〈服装倒錯〉へと直結しやすいのに対し、受動的エロチズムへの羨望は当初は受身的同性愛の実行へと導く傾向があり**、最後に対人的依存性への羨望は、他に比べて早期に発見しやすく、思春期以前に出現した場合には単なる女装趣味を越えて真性異性化願望にまで発展することが多い、と言えるかもしれない。しかしながらたとえ最初の羨望がいかなる面から始まろうとも、のり越え不能の欲求阻止状態が持続するにつれ女性の諸属性のあらゆる面へと領域を拡大してゆき、ついには、「女でさえあったなら」という全一不可分の願望となつて彼を懊悩させるにいたるのも、これまた十分に了解されうることであろう。それゆえ問題の焦点は、いまや、なにゆえに女装者は女性を羨望するかということから、なにゆえに大多数の男性はかかる羨望を経験しないのであろうか、という点に移されなければならないのである。

序論において紹介した Brierley (1979) の問題提起、すなわち、「女装の何が社会をかくも恐れさせるのであろうか」という問いにまず答えておくことが、問題全体の解明へとおのずと通ずる途であろう。世の〈正常な〉男性たちが女性羨望を意識的には経験せず、そのくせ女装者に直面して相手をまともに受けとめることができず、嫌悪、羞恥、恐慌及びそれら内心の動揺を押し隠すもの

* われわれの見解に反し、Freud は、幼児の性生活を、本質的に能動的・男性的なものとし、*「小さい女の子は小さい男の子」* (Freud, 1953) などと述べているが、なぜかかる奇妙な主張がなされたのであろうか。土居 (1971) の指摘するとき、西欧近代社会における受動的欲求蔑視という文化的背景がひとつの要因となっていることは疑いえないが、筆者としてはなお、次のことを付け加えておきたい。すなわち、Freud は、有機的欲求（性欲を含む生理的欲求）と機能的欲求の区別を知らず、それゆえに幼児のみかけの運動量の大きさに眩惑され、性欲の能動的発現と見誤ったのではなからうかということである。乳幼児が母親の身体をつかんだり噛んだりする〈能動的行為〉を好むとしても、それは Piaget (1936) の言うところの感覚運動的スキーマの、機能的欲求に基づく発動に過ぎず、Freud が説くごとき性的な意味を認める必要はない、と筆者は考えるものである。

** M. R. の事例 (28頁参照) がその典型である。ここで注意しておきたいが、同性愛の実行と、同性愛者であることとは、あくまでも区別して考えねばならない。真に同性愛者であるためには、なによりも「男が好き」でなければならない。これに対してCクラブの女装愛好者は、もっぱら女性羨望から男に身を任すのであって、そこには真の対象関係はない。ただし年下の女装者との邂逅によって能動的同性愛者へと転身してゆくことがありうることは、すでに述べた通りである。

としての嘲笑——といった、目を背けることをその本質とする感情的反応をもって対するとしたら、想像しうる原因はひとつしかない。すなわち——

彼らの嫌悪や羞恥の深層には、女性に対する無意識の嫉妬羨望が隠れひそんでいるということである。世の＜正常な＞男性たちは、女性のごとく美でありたいという、見られるもの、受動性でありたいという、己れの意識下ふかく封じ込めて来た欲望と願望とが、可視的な形姿を取って白日の下に晒されるのに直面して恐慌にとらえられ、目をそむけ、心理的逃走をはかるのだと考えられるのである。それゆえにこそ、身体障害者や精神病者のような人々に対してさえも真面目な態度で接するのを旨とする＜人道的＞な人士であっても、女装者に対しては真面目な態度を持することができず、＜笑ってしまう＞のであろう。なんとすれば、笑いとは——なかならず失笑嘲笑の類は——不在証明への企てに他ならず、ただ笑うことによってのみわれわれは、羞恥や嫌悪といった外被をまとして深層から浮上してくる、己れと女装者との間の本源的同一性の関係から、身をひきはがすことができるからである。

ここで、女装者に対する男性一般の過敏な反応の由来は、男性のプライドが傷つけられるという点にあるのではないか、男性優位の神話にいまだふかく支配されている彼らにとって、劣位者であるはずの女性を模倣したがる同胞を持つということがそもそも気に喰わないのではないか、という反論がなされるかもしれない。しかしながらこの解釈は、表層の水準ではどれほどもっともらしく見えようとも、深層の真実にふれるものではけっしてない。そもそも歴史がわれわれに示すところのものは、一般に、劣位者が優位者を模倣することには厳しいタブーがあったのに対し、その逆は遊戯や気まぐれとして許容されていたという事実であり、序論においてすでにふれたように、異装においてもこのことは何ら例外ではなかったのである。「昔の社会のみならず、今でもなおアフリカやアジアでは、化粧や装身具や仮装をもちいて男が表面上女性となる多くの実例があることを、私はよく知っている。…(略)…仮装は二つの原理間の移行を意味すると同時に、両性の相違を超越できる能力が男にあることを示している。最大の能力をもつ者には最小のことも可能だからである。」(Nelli, 1972) それゆえ、西欧社会において、なかならずその近代化過程において、男性が「両性の相違を超越できる能力」を自ら抛擲し*、それどころか今世紀、女性の服装の自由化がかくも進展した現在に至ってもなお厳しいタブーの支配下に置かれていることに対しては、全く別の説明が考えられなければならないのである。

かくしてわれわれは、男性一般の意識下に伏在する女性への羨望嫉妬という、男性にとってはいささか意気消沈させる、女性にとっても衝撃的であろう深層の秘密へと到達することによって、女装の問題を女装趣味者の問題から万人の問題へと、その真の場所へと置き換えることができたように思う。＜正常な＞男性と女装者の相異は全くのところ、前者が、様々な防衛機制の助けを借りて女性羨望を抑圧するのに成功した人々である、という点にしかない。ここでは、それら美や受動性への傾斜に対して内的な防壁を構築するにあずかって力のある防衛機制の具体的諸相には立ち入らないが、思うにかの男性優位の神話なるものもまた、防衛機制によって利用されうる強力な武器のひとつであるだろう。多くの男性が男女平等のたてまえとは裏腹に、肚の底ではけっしてこの神話を捨てようとはしない理由も、まさにこの点に求められなければならない。彼らは己れの意識下に奥深くひそむ女性への嫉妬羨望へ目を向けることを恐怖するがゆえに、いよいよもって男性優位の観念にしがみつき、女性羨望の意識的な実行者であるところの女装趣味者に対し、自分自身のアイデンティティが根底から脅されるが如き恐怖と恐慌とをもって反応せずにはいられないのである。

* 西欧文明における女装タブーの完成は、17世紀半ば演劇の舞台から女装の少年俳優が最後的に追放された時点に求められるであろう。

女性には察するにかかる根深い異性羨望は稀なのであろう。「男はいいわね」という、われわれが日常しばしば耳にするところの、女性による男性羨望の公然たる表明は、実際には、彼女らにとって異性羨望とは、脅威的に発展する可能性を蔵する根強いものでは何らなく、それゆえ自ら目をそむける必要もないという、真相を示唆するものであるだろう。今日、女性は自らの性アイデンティティを、男性に比べはるかに強固な自信と安定との上に築き上げているのであり、彼女らの、服装その他の面における男性模倣の公然性は、一般に信じられているように彼女らの男性羨望の強さを表わすものでは毛頭なく、根底において羨望から解放されている者の、強者の余裕の上に立った遊戯と気まぐれなのである。すなわち、逆説的に聞こえるかもしれないが、男性がスカートをはくことができないのは、深層において女性を羨望するがゆえであり、女性がズボンをはくことができるのは深層において男性を羨望しないがゆえである、とすることができるのである。

それにしても、かような男性一般の意識下に伏在する女性への嫉妬羨望とは、いったい何処に由来するものであろうか。それはあたかも人類という〈種に固有な行動 species specific behaviour〉のようなものであり、男性である限り背負わなければならない、宿命的な呪いなのであろうか。文化人類学者 M. Mead (1949) は、ポリネシアの部族の幾つかにおいて、男が女の月経や妊娠や出産の行為を儀式的に模倣するという義務づけられた風習の存在を示すことによって、女性羨望の、人類社会の初期にまで遡りうる遠い由来についていくばくかの示唆を投げかけている。また最近の性科学は、受精後3週間目以降いくつかの分岐点を経つつなされる性分化の道筋を明らかにすることを通じ、各分岐点での分化への指令情報の欠損はXY染色体を備えた胎児を女性として分化発達させてしまう一方、XX型胎児の女性への発達にはかかる〈指令〉を要さないという、いわば自然の選択があたかも常に女性を造ることにあるかのとき、「イヴ原則」(Money & Tucker, 1975) の存在を指摘することによって、男性のアイデンティティの不安定さと傷つき易さという経験的事実への、生得的生物学的基礎を提供している。もっとも、人類学的データの示すところの女性羨望は、生命の創造という、未開人の眼には超自然的とも映じたであろう女性の能力にもっぱら向けられたものであって、われわれの社会のなかんずく女装愛好者において問題となるような羨望項目に直接結びつくものではない。これに対して「イヴ原則」の方は、少なくとも異性化願望の男性における圧倒的多発という現象に、かなりの程度生物学的な論拠を与えるものであるかもしれない。しかしながらかかる生得説的知見に加えわれわれはなお、具体的な羨望項目としてすでに検討した〈美〉その他の諸属性に対する、近代文明固有の事情というものを、考慮してみる必要があるだろう。

すでにわれわれは、同性愛タブーを扱った前の論文において、〈美〉における女性の優位が人類始まって以来固定したものであったかのように考えることが全くの俗見であり、それどころか現在見るような女性権権がたかだかこの4、5世紀の間に打ちたてられたに過ぎないことを、主として美術史に手掛りを求めつつ論証したのであった（渡辺, 1979）。すなわち、男性固有の美の否定、〈見られるもの〉としての肉体性の否定は、後期ルネサンスの16世紀、近世ブルジョア階級が、「男性は美しくある必要がない」という未聞の思想をひっさげて世界史の主人公として登場して来たことに端を発するのであり、美術史の上ではこれは、裸像芸術におけるギリシア以来の男性裸像の優位が女性裸像に、裸体美の具現者としてのアポロンのテーマがヴィーナスのテーマにとって代られたことに、象徴的に表わされている。続く17、18世紀、〈男性の灰色化〉は着実に進行し、culotte 族（＝貴族）から sans-culotte 族（＝ブルジョア）への政權交代は男性美装の伝統にとどめを刺し、19世紀には男性裸像は絵画の世界からはほぼ完全に放逐されるに至り、今日のわれわれは着衣裸体を問わず男性美の表現が美術の上になされるのを目撃する機会をもはや持たない。この推移、筆者がかつて「美の女性への専門化現象」と名づけたところの特異な過程が、近代市民社会形成の過程と正確に対応するものであることは言うまでもなく、とどのつまりは近代ブルジョ

ア階級固有の価値意識が、江戸末期以降のわが国や少し遅れて他の東洋諸国をも傘下に収めつつ全世界を征覇し、不可視の権力と化してわれわれの内面を支配するに至る過程の一表現形態なのであった。美や視線客体のみならず受動性の領域においても、事態は同様であった。男性としての自己、または他者の受動的エロチズムの実現をその必須の契機として含むところの〈男色 $\pi\alpha\rho\epsilon\rho\alpha\sigma\tau(\alpha)$ 〉は、古代ギリシア・ローマ文明やわが極東文明圏を始めとするもろもろの非西欧の文明にあってはタブーの支配は認めがたく、それどころか西欧文明の内部にあってさえも、真に内面化されたタブーは——常識に反して——プロティスタンティズムと資本主義の精神の登場をまって初めて完成されたと見られるふしがあるのである。受動性の社会的側面であるところの対人的依存性についてもその全面的な蔑視の根源は、土居（1971）の指摘するように近世におけるブルジョアジーの「自立の精神」の強調と表裏一体を成すものであっただろう。「甘え」の横溢がみられるのは日本のような、本来母系制を特色とした社会のみの現象ではない。父権的宗教の代表のごとく言われるキリスト教の支配下においてさえも、中世カソリック社会の人々は、前代からの大地母神に対する信仰を、公認の教義にはないはずの〈聖母〉神仰として復活させ、大いなる母の懷に抱かれることを冀うことによって依存へのふかい要求を、抑圧することなく昇華しえたのであった*。

かくして見ると、近代に先行するもろもろの伝統的文明にあっては、男性は美や受動性を相当程度女性と共有していたのであり、したがってこれらの点に関して彼らに女性を羨望する動機はさしてなかったであろう、と想像せざるをえないのである。ギリシア・ローマの若い男性の服装は、現代の若い女性同様解放的なものだったし、中世貴族社会の男性も、女性に劣らぬ華麗な装いをしていた。わが国でも平安朝以来、水干に袴という少年美装の伝統が持続したし、安土桃山時代から江戸初期にかけては、24、5の頃まで前髪を切らぬ〈大若衆〉が、女装と見紛うなまめかしい振袖の男姿(!)で、城下町を練り歩く風俗が見られたのであった**。それゆえ、すでに述べたように「美にとりつかれた人々」と特徴づけるところの現代の女装趣味者ももしこれらの時代に生まれ合わせていたとしたならば、「女になりたい」となどという願望とはついに無縁で一生を終えることができたかもしれない、と想像してみることは不可能ではない。彼らの——なかならず女装愛好者 transvestite の——女装への執着とその発展としての変性への願望は、匹竟、男性のまま、男姿のままで美でありうるという男性の歴史的権利が、近代に至って否定され禁圧されてしまったところに由来しているのである。16頁に、美を求めるがゆえの女性羨望の例としてあげた横溝正史作『蔵の中』の主人公の少年が、次のように独白を続けるのは、まさしくこの点の消息の自己洞察を物語るものに他ならないであろう。

「……女に生まれていたら毎日こうしてお化粧も出来、色美しく肌触りのいい着物を着てくらせるのに、男に生まれたばかりに、こんなゴツゴツとした、くすんだ色の着物よりほかに着ることも出来ず、お化粧をするわけにも参りません、何という勿体ない事であろうと私は思わずふかい溜め息をつくのですが、更にまたもう一つ突っ込んで考えると、男でもいいからせめてもっと違った時代に生まれたなら、これほど味気ない思いをせずとも済んでいたであろうと、残念で耐らないのです。私はしばしば草双紙で読んだ時代加賀見の藤浪由縁之丞や、白縫物語の青柳春之助のように、曙染の振袖に茶字の袴をはいた前髪立ちの、美しいお小姓姿をした自分の面影を夢や幻に見ることがあります。ああ、天下三美童と謳われ、世間からもてはやされたあの名古屋山三や不破万作と雖も、果たして私の夢にしばしば現われる美しいお小姓姿の自分よ

* 湯浅泰雄「ユングとキリスト教」（1978）を参照。

** 「むかしは寛永・正保のところまでは、男は大方二十四・五歳までは童姿にてありし、これを大若衆と言ひける。」「小生が英国でやっしまいし大若衆錦絵は、実によく出来おりしが、写しにて本物にあらず、とにかく大若衆が娼妓が何かにいい寄るような図にて、女の粧いよりはるかに大若衆の方が綺羅を尽し、また濃化粧なりし。（決して俳優などにはあらず、貴公子よろしく見え候。）これにてそのころの大若衆のどんなものたるを解するに足るものなりし。」（南方熊楠、1975）

り美しかったであろうかと思うと、私はこういう殺風景な時代にうまれた自分が残念で耐りません。」（傍点筆者）

思うに、われわれが今日直面しているところの女装タブーとは、ふたつの異なる局面へと分析されえるものであるだろう。まずそれは、「男性の肉体に美と受動性と（視線）客体性を認めることのタブー」と前論文において定義したところの、近代文明に固有な深層のタブーの、直接の表現型態の一つとして見るができる。しかしながらこの意味でのタブーは、わが国においては、女方の残存や法的処罰規定の不在にも窺えるように、けっして完全なものにはなりえなかった。女装タブーを真に内的に強固なものとしているのは、その結果として蓄積されていった女性羨望への、二次的な防衛反応の方である。すなわち、近代化の進展に伴い男性が、〈美〉から、〈受動性〉から、そして〈視線客体性〉から全面撤退を開始するにつれて、男性の深層には深甚な欲求不満が、そして女性への羨望が産み出され、蓄積していったのであった。ほんの一握りの者のみがこの羨望を意識化し、これ以上社会によって命じられたところの〈男性〉であり続けることは首枷以外の何ものでもないことを悟り、女装による男性アイデンティティ再拡大の企てへと歩み出した。これに対して大多数の男性は、己れの意識下ふかく封じ込めて来たはずの願望と欲望とが可視的な形姿をとって白日の下に顕つたのを目撃して恐慌にとらえられ、服装倒錯なる語を発明して女装者を性医学や異常心理学の専門書の中に閉じ込め、あげくの果ては彼らを〈治療〉しようとさえ企てるのである*。——これが、伝統的諸文明において、男性の女装に女性の男装よりも概して一層の許容と威信とが与えられて来たという歴史的経緯にもかかわらず、〈デモクラシー社会〉において、かえって男性のみがいまだに異装タブーに膝を屈したままでいなければならないという奇怪な現象の依って来る深層の事由である。

地理上の発見に始まるヨーロッパ世界の膨張とそれに引続く近代市民社会形成の諸世紀、それはまた他の面から見れば、男性がおのれのアイデンティティ領域から女性のそれと共通の部分の次々と切り捨ててゆくという、〈過男性化〉とでも称すべき過程の進行した時代であった。すなわち近代人男性は、美や受動性などの諸価値を——ひとことで言えば己れのエロスの肉体性を——おそらくは自由と自立と（武器または認識による）世界及び自然界征服の野望の前に、障碍として否定せんとしたのであるが、眼をつぶっただけでは実在するものを消滅させることはできない。それゆえ彼は、それを外部に、すなわち女性へと投影し、全面的に女性に押しつけることによって女性をかつてなかったほどにエロチックに飾り立て、しかるのち女性の獲得を通じて、他者として〈所有〉の関係を取り結ぶという戦略を——むろん無意識のダイナミクスとしてではあるが——採用したのだった。われわれは、近代の支配者たるブルジョアジーの〈所有〉の論理と意識とを前提とせずには真に完璧に成立しえなかったであろうところのこのエロチズムを、〈所有のエロチズム〉と名づけて〈存在のエロチズム〉に対比させ、近代に固有な男性のエロチズムの様式とすることができるのである。

それにしても、近代人男性とは何だったのであろうか。さしも堅固な支配を誇ったそのエロチズムに、20世紀も終りに近づいた今日、破綻がようやく顕在化しつつあるのをわれわれは見る。蔑視され抑圧され外在化されたわれわれ自身のエロスの肉体性、エロスの諸可能性は、いまや、精神性を剝奪された〈セックス〉として、性的女体商品の茫濫として、外部からわれわれ男性を襲撃しつ

* 筆者はすべての女装愛好者が心理的に健康であることを主張するのでは毛頭ない。多くの女装者が、女装強迫とでも言うべき状態にあることはこれまでも指摘されて来たことであるし（Benjamin, 1966, Buhrich, 1978）、われわれのフィールドワークからも窺えることであった（7頁、U. Q. の例）。しかしこの強迫症状自体、脅威的な社会との対峙を休みなく強いられたがゆえの、2次の産物と見なすことができるのである。

つあるし、また男性の社会的地位の相対的低下は、男性アイデンティティのよりどころとしての男性的自負を解体せしめ、内部に鬱積した女性羨望を顕在化し、女装趣味者を激増させている。ステレオタイプ化した男性の性役割に対する不満は、すでに欧米諸国において、性対象選択という、性アイデンティティの比較的辺縁的な領域において爆発し、ホモセクシュアルパワーを台頭させているのである。かかる気運が持続するとすれば、不満の自覚が中核的部分にまで及び、強大なタブーを打破して近代的人間像＝男性像の男性自らにとっての抑圧の本質が正面から問われ、自ら疎外して来たところの＜存在のエロス＞回復の企てがなされるようになる日が、いつかは来ないと限らないのではあるまいか。

その行動と習癖とが一般の眼にはどれほど奇異に映ろうとも、女装者とは、いわば負の十字架にかけられた者として、まさにその奇異さ、グロテスクさによって、近代的人間像を熾烈に告発してやまない存在であるだろう。

REFERENCES

- 秋山 駿 抽象的な人間。「内部の人間」所収、南北社、1967 a.
 秋山 駿 私は一つの石塊を拾った……。「内部の人間」所収、南北社、1967 b.
 朝山新一 世界の性学と性教育の動向。「人間の心と性科学Ⅱ」(徳田良仁、小林司編)所収、星和書店、1978.
 Balint, M. Primary Love and Psychoanalytic Technique. New York: Liveright Press, 1965.
 ボーヴォアール, S. de (生島遼一訳) 第二の性. 新潮社、1959. (Beauvoir, S. de: Le Deuxième sexe. Paris: Gallimard, 1949.)
 Benjamin, H. Transvestism and Transsexualism: Symposium. American Journal of Psychotherapy, 8, 219-230, 1954.
 Benjamin, H. Clinical Aspects of Transsexualism in the Male and Female. American Journal of Psychotherapy, 18, 1964.
 Benjamin, H. Transsexual Phenomenon. New York: Warner Books, 1966.
 Brierley, H. Transvestism: A Handbook with case studies for psychologists, psychiatrists and counsellors. Oxford: Pergamon Press, 1979.
 Buckner, H. T. The Transvestic Career Path. Psychiatry, 33, 381-389, 1970.
 Buhrich, N. Motivation for cross-dressing in heterosexual transvestism. Acta Psychiatrica Scandinavica, 57, 145-152, 1978.
 Daniel, M. & Baudry, A. Les homosexuels. Tournai: Casterman, 1973.
 土居健郎 精神分析と精神病理. 弘文堂、1965.
 土居健郎 甘えの構造. 弘文堂、1971.
 エリアーデ, M. (宮治昭訳) 悪魔と両性具有. せりか書房、1974. (Eliade, M. Méphistophélès et l'androgyne, Paris: Gallimard, 1962)
 エリソン, R. (橋本福夫訳) 見えない人間. 早川書房、1961. (Ellison, R. Invisible Man. New York: Random House, 1952)
 Feinbloom, D. H. Transvestites and Transsexuals: Mixed views. Seymour Lawrence: Delacorte Press, 1976.
 Freud, S. Three Essays on the Theory of Sexuality. In the Standard Edition of the Complete Psychological Works of S. Freud, Vol. 7, London: Hogarth Press, 1953.
 福永武彦 夜の三部作. 講談社、1969.
 Green, R. Mythological and Cross Cultural Aspects of Transsexualism. In R. Green & J. Money (Eds.), Transsexualism and Sex Reassignment. Baltimore: John Hopkins University Press, 1969.
 Gutheil, E. The Psychological Background of Transsexualism and Transvestism. American Journal of Psychotherapy, 8, 231-239, 1954.
 Hirschfeld, M. Die Transvestiten. Leipzig: Verlag "Wahrheit", 1925.
 岩田準一 本朝男色考. 鳥羽市: 岩田貞雄発行、1973.
 ヤスベルス, C. (内村、西丸、島崎、岡田訳) 精神病理学総論. 岩波書店、1953. (Jaspers, C. Allgemeine Psychopathologie, 5 Aufl., Berlin: Springer Verlag, 1948)
 カミュ, A. (佐藤朔訳) 転落. 「転落・追放と王國」所収. 新潮社、1968. (Camus, A. La chute. Paris: Gallimard, 1956.)

- Levine, E. M. Male Transsexuals in the Homosexual Subculture. *American Journal of Psychiatry*, 133, 1318-1321, 1976.
- Lukianowicz, N. Survey of Various Aspects of Transvestism in the Light of Our Present Knowledge. *Journal of Nervous & Mental Disease*, 128, 136-64, 1959.
- ミード, M. (田中寿美子, 加藤秀俊訳) 男性と女性. 東京創元社, 1961. (Mead, M. *Male and Female*. New York: Mentor, 1949.)
- 南方熊楠 岩田準一宛書簡(昭和7年). 南方熊楠全集7所収, 平凡社, 1975.
- Money, J. & Ehrhardt, A. *Man & Woman Boy & Girl: The differentiation and dimorphism of gender identity from conception to maturity*. Baltimore: John Hopkins University Press, 1972.
- マネー, J. & タッカー, P. (朝山新一他訳) 性の署名. 人文書院, 1979. (Money, J. & Tucker, p. *Sexual Signatures: On being a man and a woman*. Boston: Little Brown & Co., 1975.)
- 中井英夫 薔人. 「人外境通信」所収, 平凡社, 1976.
- ネリ, R. (有田忠郎, 渡辺昌美訳) エロチックと文明. 紀伊国屋書店, 1979. (Nelli, R. *Érotique et civilisations*. Paris: Lebrairie Weber, 1972.)
- Pauly, I. B. Adult Manifestations of Male Transsexualism. In R. Green & J. Money (Eds.), *Transsexualism and sex Reassignment*. Baltimore: John Hopkins University Press, 1969 a.
- Pauly, I. B. Adult Manifestations of Female Transsexualism. In R. Green & J. Money (Eds.), *Transsexualism and Sex Reassignment*. Baltimore: John Hopkins University Press, 1969 b.
- Piaget, J. *La Naissance de l'intelligence chez l'enfant*. Neuchâtel et Paris: Delachaux & Niestlé, 1936.
- Prince, C. V. Homosexuality, Transvestism and Transsexualism. *American Journal of Psychotherapy*, 11, 80-86, 1957.
- Prince, C. V. *Transvestite and His Wife*. Argyle Books, 1967.
- Prince, C. V. & Bentler, P. M. Survey of 504 Cases of Transvestism. *Psychological Reports*, 31, 903-917, 1972.
- サルトル, J.-P. (松浪信三郎訳) 存在と無. 人文書院, 1962. (Sartre, J.-P. *L'être et le neant*. Paris: Gallimard, 1946.)
- 波沢竜彦 エロティシズム. 桃源社, 1977.
- Stoller, R. J. *Sex and Gender*. New York: Science House, 1968.
- Stoller, R. J. Parental Influences in Male Transsexualism. In R. Green & J. Money (Eds.), *Transsexualism and Sex Reassignment*. Baltimore: John Hopkins University Press, 1969.
- 鈴木道彦 日本のジュネ. いいだも編「反抗的人間」所収. 平凡社, 1967.
- 渡辺恒夫 近代・男性・同性愛タブー. —文明, および倒錯の概念(一)—. 高知大学学術研究報告, 28, 27-45, 1979.
- 横溝正史 蔵の中(1935年発表). 新版横溝正史全集2所収, 講談社, 1975.
- 吉行淳之介 砂の上の植物群. 新潮社, 1967.
- 湯浅泰雄 ユングとキリスト教. 人文書院, 1908.

(昭和55年8月16日受理)

(昭和55年12月20日発行)

